
ミューズゼロ 《読みにくい方はフレイムファンタジーを見て下さい》

望月シオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミューズゼロ《読みにくい方はフレームファンタジーを見て下さい》

【Nコード】

N2575E

【作者名】

望月シオン

【あらすじ】

宇宙の果てにある…もう一つの命の星の物語

その世界の成り立ち

はるか宇宙の彼方に…もう一つの太陽系がある…。
カナンとよばれる恒星のまわりには…

炎の星テジヤスをはじめ…金の星アツタル。海の星エル。風の星エ
トランゼ。土色の星プリティア。氷の星アパス。

そしてヨミの星ラグナロクと7つの惑星が存在した…。

その中の1つである海の星アクアマリン…

私達の世界の月と同等の大きさである…この命の星から、すべての
物語が始まる…

三十億年前…

隕石の衝突で生まれたこの星は、二十億年前…

大量の雨で海を誕生させた…

生命の営みは、ゆっくりと流れ…十億年前に海の中で生まれた植物
は…やがて地上にも生まれるようになり

三億年前…霊虫と呼ばれる始まりの虫が、この地に姿を見せる。

そのあと霊虫は、長い時間をかけて進化し…

二億年前…エンシェント・インセプターと呼ばれる虫達が生まれ…

現在の生態系の元となった…。

そして…

それから進化した魚類や両生類が生まれる中…

そこから海蛇の一種として、始祖竜と呼ばれる手足の無い竜へと進
化する者も現れ…

そこから生まれた地竜、海竜、翼竜が三界を支配し…竜達の時代が
始まった

それが竜の文明の始まりである…

そして一億年前：進化を続けて、脳を発達させた事で死を理解した竜達は、

それから…生の先に死がある事を知り…

死から逃れよう^{のが}と集団で知恵を出しあうようになる…

そして竜達はやがて…ある1匹の子供の竜に、それらで得た知恵をそそぎこみ…その竜が大人になり成竜となると、自分達の長へと奉^{まっ}りあげた…

。 竜王の誕生である

…それから竜王は、2代〜3代〜と長い時間をかけて進化していく中で…

死は逃れる事はできないが意思は永遠に残せるかもしれないと考えるようになる…。

そして…その知恵がやがて魔法を生み出し…竜王は、その頃にはもう賢くな^{かしこ}っていた竜達にその術^{すべ}を伝えた…

そしてそれが魔法文明の始まりでもあった…

。 意思が世界に強く影響するこの世界で魔法の存在を知った竜達の文明は、栄華^{えいが}を極めるが…

6500万年前に起こったメテオと呼ばれる隕石群の襲来が原因で、突然終わりを迎えた…。

しかし魔法の力^{ちから}でメテオを予知していた当時の竜王は、絶滅を避ける為に自分の子供を地中深くに封印し…長い眠りにつかせた…

。 そしてそれから千年後…

眠りについた子供の竜は、竜王の魔法のおかげで生き残り…長い眠りから覚めると…しばらくは仲間の姿を捜^{さが}していたが…

見つかるのは小さな動物の姿ばかりだった…。

そして…賢かった最後の竜は、そこで他の竜達がもう存在しない事を知り…

せめて自分達が積み重ねてきた知恵の証を残そうと…土や石、あるいは、石板などに多くの文字を刻んだという…

そしてその竜は、猿の祖先である…ほ乳類の動物に可能性を感じて…魔法で自分達が積み重ねてきた竜の知恵を…その動物に継承^{けいしょう}させた。たとえ今は理解できなくても…いつかこの記憶を呼び覚ます者が現れるだろうと…遺伝子の中に情報を残したのである…。

そして…そのほ乳類の子孫である猿人達の中に覚醒者と呼ばれる者達が現れ…

250万年前頃から…類人猿の中に炎を操^{あやつ}る術をもつ者が増え始めた…。

それから魔法の片鱗^{へんりん}を見せはじめた人類は…それから風や水…あるいは、大地の力をも操る術を発見すると…

そこからさらに200万年もの長い時間をかけて…それを魔法の源流へと進化させた…

第二期魔法文明の始まりである

…それから…エンシエントマジックと呼ばれる古代魔法を生み出した人類は、

その頃から…最後の竜が土や石などに書いて残した文字や記号の事を知り…

最初はそれを読み解けなかったが…子供あるいは、その孫へと進化をするたびに脳が発達していく事で…それを読み解いていく…

そして15万年前に現れた旧人達は死の存在を知った…

それから死を知った事で…終わりがあるという事実を恐れた旧人達

は、集会などを開き…

そこから逃れる^{のが}ためには、どうしたらいいのかと知恵を出し合い…
死を越えた^こ存在を想像する事で、死への恐怖から解放された…

神の誕生である

…
そして五万年前…

限りなく現代人に近い姿となった旧人達は、カドモンと呼ばれる男
を…神に選ばれた者として自分達のリーダーとした

。世界最初の王の誕生である。

…
そして、その頃から人々は、死を逃れるための力^{ちから}を魔法に求め始め
…神に近づこうと様々《さまざま》な魔術を生み出したのである…

。それが第三期…近代魔法文明の幕開け^{まくあ}である

。それから…

魔法によるさらなる発展を求めた人類は…自然をも変えてしまうほどの強大な力を手にするのだが…

そのために人々は、傲慢^{しうまん}になり…

その歪^{ゆが}んだ心が魔法をも狂わせるようになる…。

そして…それらの暴走した魔法のせいで、人々の中に人ではない者へ姿を変える者が現れた…

。かつての人々は、その怪物達をケムダーと呼んだ

そして欲望にのみこまれてケムダーとなった人達は、怪物の姿にならずに…ずっと人のままでいる善人達^{ねた}を妬^{ねた}んでは、次々と殺していき…

そしてそれが原因となり…とうとう人々とケムダー達の戦争が始まった。

そして・・・

その戦争によつて、もたらされる混乱や絶望は…人々にさらなる怒りや悲しみをもたらした…

終わることなくぶつかり合う魔法は、天地を狂わせるほどにすさまじく…

そのせいで世界中に地震や津波が多発するようになり…

そして、それらの事が原因で起こった惨事^{さんじ}は…当時の魔法にかかわりをもつ者達をすべて絶滅させたといわれている…

それは後の人々^{のち}にメギドラの災厄と呼ばれた。

そして・・・

14000年前に起こったといわれるその大災害で…人類は滅亡したかに思われた…

しかし当時…辺境の地で魔法を知らずに育った人々が生き残り…現在に生きている人達の祖先となったのである

・・・

。

その世界の成り立ち（後書き）

今まで見ていた読者の方、今まで執筆できなくて・・・ごめんなさい
…。新作は、6月までに何とか間に合わせたいと思います。

第1話「コボルトになった少年」Aパート

。はるか宇宙の彼方にアクアマリンという海の星がある…

月と同じくらいの大きさのその星は、私達の地球と同じように人々
が中心となつて生活をしていた…。

。その中の南西の国ジャンボ…

私達の世界でのアフリカのガーナに位置する…このジャンボという
国の中に番犬族と呼ばれる狩猟民族しゅりやうみんぞくの村がある…

リカオンの村

昔ながらの木造建築が並ぶこの家にココホレの家がある。

てんじょう

天井が3メートルくらいしかなく…周囲が10メートル四方しかな

いこの家に父親と子供が二人で生活していた…

。父親の名前は、マテ。

百六十センチくらいの身長で…坊主ぼんずと呼ばれる髪かみの無い頭をした男
だ。

狩猟民族の衣装を着たこの男は、かつて貿易商人の付き人として世
界中を旅していた…。

子供の名前はポチ。

父親と同じような坊主頭と衣装を着た身長約1メートルの父親を小
さくしたような少年である…

。そんなマテとポチは家の中で、木で出来たテーブルをはさんで向か
い合いながら何やら話をしていた。

…

マテ

「そこで私はひくまをあそこに掛けてある槍で倒し彼の危機を救ったん

だ…」

。 自慢じまんげ気に話す父に…ポチは両目を輝かせながら

… 「それで父さんとその人は友達になっただね…」

。 そう話すとマテは、

「そうだ…」

… と遠くを見つめるような目で、過去の日々《ひび》を思い出しながら

… 「そのあと私と彼は、いろんな話しをしているうちに、すっかり意い気き投合とうごうして親交を深めたんだ…」

だが当時の私は貿易商人の付き人をしていたので…

取引が終われば商人達と一緒にその地を去らねばならなかった…」

。 テーブルの向かい側の席に座るポチに、そんなことを話すと

… 「でも手紙のやりとりは今もしてるんですよ。」

、 ぼく知ってるよ…と話すポチにマテは

「そうだな…」

… と、うなづいたあと

… 「彼と別れる時に住所が書かれた小さな紙をもらってな…」

あの時は、世界中を旅していたから、どうしようと思ったが…この村に定住した事で、彼と手紙のやりとりが出来るようになったんだ

…」

。

そう言つて、それを聞いたポチが、
「そうかあ…」

いいなあ…ばくもいつかジパングに行つてみたいなあ…」

まだ見ぬ東洋の国の事を想像していると…

突然テーブルの向かいの方に座つていたマテが

…
「行つてみたいか？」

…と突然ポチに聞いてきたので

…
「うん。行く行く！」

…とポチが元氣良く返事をする…マテは、
「そうか…」

…と席から立ち上がつてから家の隅^{すみ}の方まで行つて…
藁^{わら}の下に隠していたジパング行きの船に乗るために必要な二枚の券^{けん}
と…

一緒に置いてあつた数枚の写真を右手に取つて、持つて来ると…
それらをテーブルの上に置いてから席に座^{すわ}つたので…

テーブルに置かれたその数枚の写真をポチが、

「わあ…」

…と両手を使つて一枚一枚眺めると…

どの写真にもマテと先ほど話に出てきたジパング人が写つていた…

そして向かいの席で写真を眺めるポチを見ながらマテが

…
「何もかもが懐^{なつか}しい思い出…」

。つばやくと…突然！外の方から

、
「ギアアアア！」

…という悲鳴が聞こえてきたので…ポチが、

「父さん…」

心配そうに声をかけると…マテは、

「大丈夫だ…」

なだめるようにポチに声をかけてから…スッと、席から立ち上がったから…

先ほどの航海「こうかい」するための券や数枚の写真が置いてあった場所の方まで行くと

…

そこにかけである先端せんたんにとがった黒曜石がついた木製の槍を右手に持ってから…ポチに

、

「お前は、ここにいろ」

…と声をかけて、家の外に出るのだった。

《つづく…》

第1話「コボルトになった少年」Bパート

マテが外へ出ると…

一歩踏み出そうとする彼の目に

…

「こ…これは…」

。

炎上する村の家が何件も映る…

だが災厄^{さいやく}は、それだけではなかった

。

「きゃあああー！」

、

「助けてくれええー！」

、

村の女性や男達が叫び声をあげながら逃げまわっている…

その中から村の民族衣装を着た褐色^{かつしよく}の肌の男が

…

「マテさん！」

…と叫びながらマテの方に近づいてくるのでマテが

「シュワシュワか！」

一体どうした！何があった！？

状況を把握^{はあく}しようとその男に聞いてみると…その男は

、

「男が…男が突然現れて村の人達を！」

その続きを言おうとした時突然！ポツと

、

「ギャアアアー！」

、

その村人の男の全身が炎に包^{つつ}まれる。

それを見て

「シュワシュワァー！」

マテが炎に身体を焼きつくされるその村人の名前を叫ぶと

…
????

「おやおや…元気の良い声が聞こえてくるねえ…」

どこかから誰かの声が聞こえてくる…

それを聞いたマテが、

（まさか？）

その声が聞こえる方向へ走ると…そこには肌を露出するような派手な服装をした美しい青年の姿があった

少し長いオレンジ色の髪に青い瞳をしたその青年は、一見女性とみまごうばかりの美青年だが…

その青年には、どこか妖しげな雰囲気^{あや}がただよっていた…。

18歳くらいに見えるその青年の姿にマテは

「貴様人間ではないな」

その姿の中に別の影を見ていた。

そして…マテのその言葉を聞いた美青年は、ニヤリと微笑^{ほほえ}みを浮かべながら

「ほう…よくわかったね。君の推察^{すいさつ}通り僕は、レッサーデーモンと呼ばれる悪魔の分身さ」

。自^{みずか}らの正体を告げる。

そんな美青年の姿をした悪魔を前にマテは

「なぜ人間の姿をしている!？」

両手で握りしめた木の槍を構えるマテの問いに…美しい青年は

「僕達悪魔はこの世界では実体では存在できない者なんでね。

こうして波長の合う人間の身体を支配する事で、この地に存在できるようになってるのさ…」

「いわばこの肉体に寄生してる訳だよ…と説明して、それを聞いたマテが

「では、その姿の本当の主は？」

…という問いに美しい青年は興味があるのかい？と微笑み

「金持ちの夫人と不倫していた貴族の息子さ…」

夢の中で夫人の姿に化けたら、あっさりと堕ちてくれたよ。

道ならぬ恋の果てに悪魔にとり憑かれるなんて…不幸だよ。この人も…」

そう言ったあとで、ハハハハハ！と笑い声をあげるので…怒りに震えたマテが

「クスが…」

はき捨てるように言うその言葉など意に介さずに美青年は

「まあ僕は、こんなカスみたいな奴の身体より…君みたいな強そう
な人の身体の方がほしかったんだけどね…」

残念そうに言うので、それで…

「だから、この村を襲^{おそ}ったのか！」

怒^{おこ}るマテの言葉に美しい青年は、

「そうじゃないよ。」

…と首を何回か横にふってから

「僕は、波長の合う人間しか乗つとる事しかできない。
だから誰にでも自由にとり憑^よける訳ではないんだよ。」

そう言うので…

「だったら、なぜ！」

こんな事をするんだ！と苛^{いらだ}立つマテに美しい青年は

…
「気にいらなからかな？」

マテ

「なに！？」

美青年

「君達番犬族は、自分よりも相手を大事にする偽善者が多いし…
古くさい秩序や文化にどこまでも忠実なご都合主義の民族だ。
それって時代遅れなんだよね。」

…
冷たい目で見ながらマテ達の部族を非難^{ひなん}し…さらに

「番犬族は三日の恩を忘れない？ヘドがでるよ。」

人間は、もっと自由で欲望に忠実なはずだろ」

。「貴様…」

怒りをグツとこらえるマテをさらに挑発するように美青年は

「このままどんどん人が欲望にのみこまれていけば、やがてかつての魔法文明のようにケムダー《貪欲なる者》に変わる者が出てくる…だから僕は、現在の時代いまにそぐわない君達のような偽善者を殺しているのさ…」

。そう言ったあとで高らかに笑う青年の姿に耐たえられなくなったマテは、両手から右手に持ちかえた槍を

、槍投げのように右肩の上までもっていき

、「キサマアアアー！」

、そのまま槍投げのフォームで青年に向かって、ブン！と投げる

。そしてマテが投げた槍は、美青年を貫いたかに見えた…。

しかしそれは美青年の胸のところをスルリと通り抜け…

そのはるかうしろの大地に槍の先端が突き刺さる。

それを見て…

、「こ…これは、一体？」

、
呆然とするマテの背後から…何者かがブスリとマテの心臓に剣を突き刺した…

。そして…

。「か…かはっ…」

。心臓を貫かれたマテの左胸から赤い血が、ツウー…と下の身体をつたって、地面の方へ流れ落ちる…

美しい青年

「さっきのは…ビジョン《幻影》っていう魔法なんだ。
へへっ…すごいでしょ」

うしろから剣を突き刺したオレンジ色の髪 of 青年の声が聞こえる中…
マテは薄れゆく意識の中で…

（ポチ…）

子供の名を呼びながら膝からくずれるようにドサツと前の方に倒れた

そしてココホレの家の中では…

「父さん？」

マテが最後に発した心の声は、テーブルの前で座って待つポチの方
へ直感という形で届いていた…

それでポチはガタツと、いても立ってもいられず…席を立て、家
の外へ飛び出すと…

ポチの目に…やがて燃える家…灰になった人々と…様々《さまざま》
な災厄が映り始めた

その悲惨な光景は、子供の心には、耐えられず

「うあ…うああん！」

思わず泣き出してしまったポチは

「父さん！父さあん！」

涙で濡れる目で父親の姿を求め、さまよいながらただ歩いていると…
やがてポチの目に…うつぶせて倒れているマテの姿が映りはじめる

。「父さん？」

泣き叫ぶのを止めてマテに近づくポチに

「おや？まだ子供が残っていたんだ…」

刃が赤い血で濡れている剣を右手に持った美しい青年が声をかける

その少し長めのオレンジ色の髪的美青年に見られている事に気づいたポチは、

「あ…あう…」

その青年から放たれる邪悪な気配を感じとったせいかな…
恐怖で声がでない…。

そんなポチをあざ笑うかのように美しい青年は

「フーン…君のお父さんなんだ この人」

血の海にうつ伏せて倒れているマテを見て

「どっしょかなー」

このままあとを追わせて殺すのも良いけど…」

どうしてほしい？と…再び恐怖で身体が硬直しているポチの方に視線を戻し…

そしてそのあと美青年は

「そうだ」

何か思いついたように一歩も動けないポチをジッと見つめ…そして

ポチ

（あれ？）

それから少し時間が経つにつれ…いつの間にかポチの身体がザワザワと毛深くなり…鼻や口がだんだんとつきだしていく…

やがて…ポチの耳の位置が上の方にずれて…顎が人間ではないものの形へと変化していた…。

そんなポチの変化を美しい青年は、得意気な顔で見下ろして

…

「君は、これからコボルトとして生きていくんだ。

ああ そうそう…

おとぎ話じゃなくて現実だから…元に戻る方法なんてないよ」

どうしても元に戻りたければ死ぬしかないね …と高らかに笑う。

するとポチは、

「あ…う…」

悪夢としか言いようのない変化に耐えられず…

父親と同じように膝からくずれおちてドサツ…と前の方に倒れた

うつ伏せに倒れたポチを見て、オシャレなブーツをはいた美しい青年は

「君はこれからその姿のせいで…もがき苦しみ絶望の中で生きていくんだよ」

再び目覚めた時が本当の地獄の始まりだよ と言に残し…その場所を去っていくのだった…

《第2話へ続く…》

第1話「コボルトになった少年」Bパート（後書き）

悪魔の呪われた力によってコボルトになったポチは、希望を求めて
ジパングへ旅立つ…

しかしそこで待っていたのは、過酷な現実だった

次回第2話「理想と現実のはざまで」

悪意のある嘘は人を滅ぼす…

第2話「理想と現実のはざまで」Aパート

それから次の日になって…狩猟民族の衣装を着たまま草むらにうつ伏せて倒れていたポチの鼻が、いつの間にか何かが焦げた二オイや生臭いにおいで充満じゅうまんしていた…

（何だろう？すごくくさいけど…）

それに鼻の感覚がいつもと違っている…。

そしてポチは

「そうだ！確か昨日…」

父親を殺した美青年にコボルトにされてしまった事を思い出し…
両手を地面についてうつ伏せていた状態から起き上がって

（あれ？目が悪くなったのかな…）

？
視界をはじめ…様々な感覚がいつもと違っている事に気づく…

そんな状態の中…ポチは、血の臭いをにじませる父の死体らしきものを見つけて…

両手を地面について、うつ伏せになっているその死体につぶやく…

「ぼく…コボルトになっちゃったよ。父さん…」

立ち上がって見る視点が低くなっている事から…どうやら身長も縮ちぢまってしまったらしい…

（これからどうすれば良いのかな…。）

…と途方にくれるポチの前にやがて…

、
「おい！陰口！^{かげぐち}」

コボルトだ！コボルトがいるぜ！」

…
足に黒い革製の靴をはいた二人の男が近づいて来る

…
陰口と呼ばれた男の方は、少し長い髪を金髪に染めた二十歳くらいの男で…

背中の方に黒い墨^{すみ}のようなもので東洋の龍^{えが}が描かれた黄色いシャツを着ていた…

。そしてもう一人の肩まで届くくらいの茶髪をした軽口という男の方は…

胸のところに墨のようなもので虎^{とら}が描かれた白いシャツを着ていて…
陰口という隣の男と同じくらいの歳に見える。

そしてその軽口という男の方が

…
「ねえ君！村がだいふ火災の被害にあったようだけど…何かあったのか？」

…と聞いてきたが…ポチには彼が何を話しているのか分からず

…
「*****…*****」
**？

…というふうにしき聞きこえなかったので…

それが相手に伝わったのか…軽口が

、
「もしかして…言葉が通じてないのか？」

…と気づいて、そしてそれまで様子を軽口の隣から見ていた陰口が

…
「コボルトじゃなくても違う国のヤツにジパングの言葉が通じるわけないだろう…」

…とジパングの言葉で言ってからポチの方を見て、
今度はポチ達が使う言葉で…

「オレ達は、ジパングから来たジパング人だ」

。そう言くと…ポチが、

「ジパング人！」

…と興味深げに金髪に髪を染めた陰口の方を見上げてきたので…陰口は、

「通じたようだな…」

ニヤリと笑ったあと…ポチに

「村の家がたくさん焼けているようだけど…」

一体何があったんだ？」

村に何があったのか？と聞いてきたので…ポチは、

「実は…」

…と村に悪魔にとり憑かれた青年がやって来た事や…その青年に父親が殺されてしまった事などを話し

…
「だからこれから父さんにもらった航海券でジパングに行きたかったんだけど…」

…
そう言ってからポチは、背中に墨で龍が描かれた黄色いシャツを着た陰口に

…
「あのう…ジパングって、どういうところなんですか？」

…
ジパングの事についてたずねると…

背の高さが百七十センチくらいの陰口は、
ニヤツ…と一瞬笑ってから…真顔で

…
「素晴らしい場所だよ。」

君みたいな亜人種も平等に暮らせるまさに理想郷さ…」

。そう言うので…ポチは、

「本当ですか!」

嬉しそうな顔で聞いてくるので、陰口は、

「本当だとも…」

だからオレも早く帰りたいんだが…実は航海券は一枚しかないんだ
…。だから君の家にある航海券の一つをもらったらちよつと良いんだ
けどな…」

。そう話し…それを聞いたポチが

、
「そんなのお安いご用ですよ!

待っててください!!今もってくるから!」

、
そう言つて、家の方に向かって走ると…

それを見届けた革製のブーツを履いた陰口は、

一瞬、ニヤリと笑つてから真顔で

、
「ありがとう…じゃあ頼むよ!」

…と少し大きな声で遠ざかるポチの背中を見送るので…彼の隣にい
る軽口が、

「なあ陰口…」

さっきまでコボルトのガキとなに話してたんだ?」

…と陰口に聞くと…陰口は、

「なあに

あのガキがジパングの事を聞きたいっていうから…

お前みたいな犬っころでも平等に暮らせる国だと答えてやったのさ…
そうしたらあのガキ喜んで券をとり家に帰りやがった」

。 おかげで券一枚の旅費が儲^{もう}かったぜ…と笑みを浮かべるので…
長めの髪を茶色く染めた軽口が

…

「バカ！お前ジパングは、昔から…って！

その前にカネはどうすんだよ！

カネがなきゃあのコボルトのガキ

ジパングで生活できないしここにも戻れねーぞ！」

。

そう陰口に言つと…陰口が、

「うるせえな！そんな事俺^{だま}が知るか！

騙^{だま}された方が悪いんだよ！」

。

そう叫んだせいで軽口は

、

「うわっ逆ギレかよ！」

、

あきれて…それ以上追求するのを止めたので…陰口は、今度は楽し
そうな顔で

…

「ハッハッハ！おもしれーよな！

何も知らねーガキや年寄りを騙すのは！」

。

そう言つて、またハッハッハ！と高笑いをあげるのだった…。

一方そんな事とは、知らずにポチは自分の家に向かつて走っていた
が…

人間だった頃とは身体の使い勝手が違うせいか…

走る途中でドスンと前の方に何度も倒れてしまう…

（でも…何だか身体が軽いや…）

そのうちポチは身体に慣れ^なれば慣れるほど…フワリとした感覚が自分の中で広がっている事に気づき…

そうやって自分の身体と悪戦苦闘しているうちに…やがて…自分の家らしきものが映りはじめたので…さらに家の間近まで近づいてから立ち止まる…

「ここ…だよね…」

もちろん人間の時とは見えている光景が違ったために
確証^{かくしょう}はないが…

（でも…ここが自分の家だって感じがする…）

それが本当かどうか…その家の中に入ってから…自分の鼻を使って確認すると

…
「クンクン…うん。この匂^{にお}いだ…」

確かにそこは、ポチとマテが住んでいた家だったと確信するのだった。

そして…

（コボルトになったせいかな？

なんだか家の中がすごく懐かしい気がする…）

そんな事を感じながらポチは、テーブルの方に進んでいき

…
「うーんと…シャシンとコーカイケンは？」

。あった！あった！」

。椅子に座ってから数枚の写真と二枚の航海券をその手に取ると…
少しのあいだ父親との思い出にひたってみる…

。 「父さん…」

。つい昨日の事なのに今思うと…ずいぶん昔の事ように感じられた…。
両手にとった写真に映る若い頃の父親の顔をポチは、思い出の中の
父の姿と重ねて

…

「父さん…ばくジパングに行くよ…。」

行けば何かが変わるかも知れない…

。何も知らない子供にとって見知らぬ国は、まるでおとぎ話に出てくる
ような魅力的な世界に感じられた…

。 「だから一緒に行こう…父さん…」

。ポチは右手に取った一枚の写真に映る父親にそう語りかけると…

ガタツと…椅子から立ち上がり…その写真と2枚の航海券を右手に
持って…

。扉の向こうにある外の世界へと一歩足を踏み出す…

。そしてポチは、それから少し歩いたあと…立ち止まり空を見上げた

。 「やっぱり空が白く見えるなあ…」

ポチがコボルトになつてから両目が大きくなつたものの…実は、その視界は退化していた…。

世界がセピア色にしか映らないし…その上その目から映る映像も人間だった頃と比べると…ボンヤリとしか映らない…。

（でも耳や鼻は、前より良くなつてゐるから…ジパングの人と話が出来たわけだけど…）

ポチの現在の視界を人に例えて説明すれば…

近眼の人が白黒の映像でしか映らない視界で見ているようなものだ…。

そんな色の無い空を見上げながら…ポチは、かつて父が話した言葉を思い出す

…

「人は死ねば空に帰る…

だけどなポチ…人は、空に帰っても空に浮かぶ白い雲や風となつて、大好きな人達を見守っているんだ」

。

それは、ポチがいつも見る空の色とは違つていた…

。

「父さん…見えてる？

ぼくは、ここにいますよ」

。

それから陰口達に航海券を一枚手渡し…港へ向かうポチの心は、人の時に見た時と変わらないあの青空の色をしていた…

。

《つつく…》

第2話「理想と現実のはざまで」Aパート（後書き）

コボルトになったあとのポチは、自分の目で見る映像が…すべて白黒テレビに映るような景色になっています。

姿や毛色は柴犬をイメージしてもらえれば…それと身長は1メートルくらいです。

第2話「現実と理想のはざまで」Bパート

…20年後・・・

ここは、どここの洞窟どうくつだろうか？

その薄暗い場所の中で、幼い少女が一人立っていた…。

その足下には、小さな泉が碧色みどりの光を放っている…。

水色の羽衣を着た白い髪の少女は、岩で出来た地面にひざまづき…

両手を使って目の前の泉の水をすくいとると…

その水に映る景色を紅い両目で見る…

そして両手ですくい上げた泉の水の中に映るものは…1人のコボルトの顔だった…

。

????

「もうすぐ…もうすぐ迎えに行くよポチ…」

。

ジパング

ポチがいた国からはるか東にある国で弓のような形をしている小さな国で…陰陽術など独自の伝統魔術が多い国である…。

またこの国は弓の形になっている事で分かる通り…

私達を知る日本と違い…北海道や沖縄にあたるところもすべて陸続きとなっており…隣の国ともつながっていた…。

そのジパングの中にKYOTOと呼ばれる場所がある。

その中のマキノという街の裏通りにある特殊人対応刑務所の囚人しゅうじんの部屋の中にポチはいた

。

囚人部屋

中央に囲炉裏いろりのある昔話に出てきそうなサッパリとした部屋で…ポチは、正座をしながら何かを待っていた…

。

そう…あれからポチには、色んな事があつた…。

ジパングに渡つてからのポチに待ち受けていたのは、過酷^{かこく}な現実だった…。

この国では、多くの人が外国人を受け入れているが…内心では、外国人がいる事を受け入れられない者もいる…

ましてコボルトの姿をしたポチが相手では…それが態度に出る事は、明らかだった…。

そのためにポチが生活をするために必要な仕事をさがそうと就職相談所に通つても…受け入れてくれる所がなかなか無く…

例え見つかったとしても…その日暮^{せい}らして精一杯^{せい}の低賃金^い《少ないお金の事》の仕事ばかりだった…

ポチ

（時にはホームレスとして生活していく事もあつたなあ…）

身長180センチに近い大人のコボルトとなつたポチの頭に…思い出したくもない苦い思い出が浮かんでくる…

そんな白いジャージを着たポチの囚人部屋の扉が開き…

百七十センチくらいの髪の毛の短い…この刑務所の看守が部屋の中に入つて来たので…ポチは立ち上がつて

…

ポチ

「古川さん」

その看守の名字を呼ぶと…その古川と呼ばれた男は

「まあ、座れや」

。

。そう言つてポチをその場所に座らせて…

。自分も囲炉裏をはさんだポチの向かいのところにあぐらをかくと…

ポチ

。「……………」

古川

。「……………」

。それからポチと古川は…少しのあいだ沈黙していたが…古川が、

「なあポチ…

なぜ？詐欺犯さぎはんの一人に噛かみついた…。

騙されたのはお前の知り合いであつて、お前じゃないだろう…」

。そう話しかけると…ポチは、

「騙された人の気持ちが分かるからですよ…。

夢や希望を逆手さかてにとられて騙されてしまったあの人の気持ち…俺には良くわかるから…」

古川

。「お前…」

。だから詐欺犯に連絡れんらくをとり…ポチの知り合いから手を退ひくように迫せまつたのだろう…

古川

（だがそれを聞いた詐欺犯は、逆ギレしてポチを脅おどそうとした…だからポチは、そいつの右腕に噛みついた…と言つ訳か…）

。真実を知れば知るほど古川は、ポチに同情しなくなつたが…

「だがな…ポチ

この国は、どんなに腐った奴でも人権という厄介なやっかいものに守られているから…外国人の…

ましてや亜人種のお前が悪者にされてしまうのは、仕方の無い事なんだよ」

。そう古川が言うと…ポチは、

「わかってますよ。」

…と、この二十年で覚えたジパングの言葉で寂しそうに話し…それから囲炉裏をはさんで、自分と向かい合っている古川に

…「それで何か他に用があるんですか？」

、正座しながら他の事を聞いてみると…古川は

「ああ！そうそう…」

…と、この部屋に来た本来の理由を思い出して

…「お前：今日からこの刑務所を出られるようになったぞ…」

。そうポチに話すと…それを聞いたポチは、

「は？」

な…なんでですか？」

いきなりこの囚人部屋を出ていいと言われたので…

どうしていいかわからずに戸惑とまどっていると…古川が

、
「ずいぶん前から…お前をここから出してほしいと頼んでいた人がいたらしくてな…」

お前のために保釈金まで払ってくれたそうなんだ」

…

そのほかにも弁護士に頼んだり…いろいろとここからポチを出すために努力をしてくれたらしい…と言うことを話すと…ポチは、不思議そうに

…

「一体どんな人なんですか？」

。

古川に聞いてくるので…古川は

、

「オレもくわしくは知らんが…

。 担当者の話では、いつも子供に使いを頼んでいるらしい…」

。

「子供に？何故そんなまわりくどい事を…」

ポチがそう聞いても古川は…

「さあ、知らんよ。」

。 まあすぐに出来るんだし…自分の目で確かめてくればいいだろ」

、 そつ答えるばかりで…例えポチが

「看守が囚人にそんなにフランクで良いんですか」

…

そう話したとしても…古川は、

「かまわんさ…。」

。 お前が真面目な性格なのは、良く分かってるしな」

。 そつかわして…立ち上がりながら

…

「さてと、そろそろここをでるぞ…。」

。 いろいろ手続きが必要だから…お前は、あとから来いよ…」

。 そつ言つて、それに対して…ポチが、

「はい！」

「ありがとうございます！」

立ち上がってから頭を下げると、古川は

「あとで住所を渡すから…刑務所を出たらちゃんと保釈金を払った人のところに行って、お礼を言うんだぞ。」

額の前に人差し指と中指を立てた右手をシュタツとかざして

「じゃあな…ポチ」

そう言って囚人部屋から去るのだった…

それから五時間後…

ポチは、刑務所を出る時にもらった住所を頼りにポチを刑務所から出してくれた人物の家へ向かっていた…

そして…とある場所の路地裏に差し掛かると…そこでポチは、ふと立ち止まって…右手で取った紙切れを見る…

「え〜と…ここを南に行つたところで…っ」と

…
そう言ってから…また歩き始めたポチの前に突然

「よう」

…
黒いスーツを着た170センチくらいの身長の方が立ちふさがる。
そして…髪を金髪に染めたその男にポチは見覚えがあった。

「お前は…確か詐欺グループの…」

ポチがそう言うとその男は、ニヤツと邪悪な笑みを浮かべて

「そうさ…テメエのせいで所属していた組織がつぶされ…そのあけ
くに右腕を噛まれたせいで、しばらく右腕が使えなくなった詐欺犯
だよ。」

…と憎しみがこもった口調で話す。

それを聞いたポチは、あきれたように

「何を言うかと思えば…

右腕をケガしたのは、お前が脅そうとしたからだし…

詐欺グループなんて潰れた方が世の中のためだろ。」

むしろその事をいつまでも根にもっているお前の考えがおかしいと

…その男に話すと…

黒い靴を履いたその元詐欺犯は

「うるせー！この偽善者！！」

…と、いきなり怒りだしてきたのでポチは

「やれやれ…まさか善行を重ねていないお前ごときが人…じゃない

か…他の生き物を偽善者呼ばわりできるとはな…」

人を偽善者と呼べるのは、それ以上の善人だけだぞ

…と話すと…

ポチの3メートルくらい前にいる…その元詐欺犯は、「いちいちう
るせーぞテメエ！！

殺すぞ！コノヤロー！」

…と叫ぶので、ポチはさらにあきれてしまい

…

「路地裏とはいえ…人が通る道のまん中で叫び声をあげるなんて…
ホントお前は自分の事しか考えていない愚か者だよね…
今度は、足にでも噛みついてやるつか？」

…
そう言ったあとコボルトである自分の口を開くと…

襟首にかかるくらい少し長い髪を金髪に染めた元詐欺犯は

、
「おう！やってみるやコラッ！！」

…と脅すような口調で言ってきたので、ポチは少し感心して

「へえ」

卑怯者の集団だと思っていた詐欺グループの一員に、まさか一対一の戦いを挑まれるとはね…

けどオレは白いジャージを着て動きやすいのに対して、君はスーツを着ていて動きにくいだろう…

一対一の勝負ならいつでも承けるから、ここは出直して来たら？」

、
先ほどとは違い…おだやかな口調でそう話す。

しかし元詐欺犯は、そこで…

「いや…その必要は、ないさ…」

。

ニヤツと、再び邪悪な笑みを見せると…

その様子を見てポチが、

「まさか！」

…と気づいた時には、すでに遅く…

後頭部に、ゴン！と金属製のバットらしきもので殴られたような衝撃が伝わるが…

それでもポチは、ほんの数秒だけふんばって

…

「ひ…ひきょう…も…の…」

…とそう言ったあとで…ドオツと前に倒れると…

うしろからバットでポチを倒した元詐欺犯の仲間が

「ふん。」

卑怯者じゃない詐欺犯なんて存在する訳ねえだろう。」

…

バットを右手にもったままそうつぶやくと…元詐欺犯に

、

「やれ！甘次^{アマジ}」

オレがやられたみたいにそいつの右手も使いものにならずしてやれ！」

。

そう言われて、アマジと呼ばれた長身の男は再び両手に持った金属バットを頭上に振り上げ

、

「だによ！悪く思ふなよコボルト」

。

そう言つて、路地裏にうつ伏せ^ぶに倒れるポチの右腕に向かって振り下ろす。

…だがその途中で…

ガキイイーン！！

、

「なにいいー！！」

、

アマジが振り下ろしたはずのバットが突然何かによって止められていた

。

それは…

「バ…馬鹿な…孫の手だとお！」

小さな少女ポチの右腕をまたいで…自分の頭の上で

左手に持った孫の手でアマジのバットを受け止めた光景だった…

。

90センチくらいの小さなその少女は、頭にかぶった麦ワラ帽子のツバの部分を

右手の人差し指の指先で、顔の前でクイツと上げて

「へっへーん 正義の味方とおじょー」

。

麦ワラ帽子によって隠れていた紅い両目で、自分の倍以上の身長があるアマジを見上げていた

。

肩までとどくくらいの薄い桜色がかかった白い髪に：黄緑色の服と同色のスカートをはいたこの麦ワラ帽子の少女は、何者なのだろうか？

、

《つづく…》

第2話【現実と理想のはざまで】Bパート（後書き）

次回予告

突如^{とつじょ}

ポチを救いに現れた

幼い少女^{おさな}…

ポチを

日溜まりの^{ひだ}

ような

明るい場所へ導く

その少女は何者なのか？

次回、第3話、

小さな魔法使い

物語は、

一気に^{いっき}

メル編^{メル}に…

第3話【小さな魔法使い】Aパート

これまでのあらすじ

白いジャージを着た
コボルトのポチは、
刑務所を出て・・・

ポチを刑務所から
出してくれた人の
ところへ

向かおうとした時に

なぜか？

その日にポチが、
刑務所を出る事を
知っていた・・・

元詐欺犯達に
おそ
襲われる。

そして、

元詐欺犯の仲間である
アマジという男に、
ポチが後頭部をバットで
叩かれて倒れた時、
とどめをさそうと
振り下ろされる
アマジのバットを・・・
突然現れた少女が

左手だけで持った
孫の手で
受け止めるのだった。

アマジは、自分が
振りおろしたバットを…

左手だけで持った
孫の手で受け止めた
小さな少女を
睨^{にら}みつけて

アマジ

「正義の味方だあ？
お嬢ちゃん、
良い子だから
そのまま帰んな。」

意外に良い人ぶりを
発^{はつ}揮し・・・

それを見ていた
元詐欺犯が

「アマジ！」

…と叫んでも、

薄い青色の
作業服らしきものを着た
アマジは、

「うるせーな！

この国は、子供の数が
少ないから…

手を出したら
重罪こゝろいふ

だって、お前も
分かってるだろう！」

…と、

この国の事情を話し…

元詐欺犯を

「くっ・・・」

納得させると、

自分のバットを孫の手で
受け止めている女の子に
アマジは…

「…と、いうわけだ。

さっさと帰んな」…と、

そう言って、

この場所から

帰らせようとする。

しかし赤いクツをはいた
その小さな女の子が、

「はい。分かりました。
じゃあ、ポチを連れて、
このまま帰りますね。」

左手に握る孫の手に
力を^{ちから}
いれながら…そう話すと

アマジは、
「コボルトを連れて
帰るだあ・・・このガキ^{ちやうし}
調子に
のりやがって！」

そう言つて、

両手に持っていた
バットから・・・

左手を離^{はな}して、

ひだりこぶし
左拳を

くりだそうとした時、

キン！！ビシッ！！
という衝撃音と共に、

アマジの右手に
握られていたはずの
バットが…

アマジの右手を離れて、
空に舞^まい・・・

それと同時にアマジの
右の手首に痛みがあった

…それは、あまりにも
一瞬の事で、

間^ま近^{ぢか}で
見ていたアマジには、
見えなかったが・・・

少し離れた場所で
見ていた…元詐欺犯は、

「連続攻撃だと！」

麦ワラ帽子をかぶった
少女が、一瞬のあいだに

左手に持った孫の手で
アマジのバットを素早く
振^ふり払^{はら}い

そのあと、さらに、

刀を抜く前の
侍のように

腰の右側の方に
左手に持った孫の手を
もっていつてから…

居合い切りの
ように…

アマジの右手首に
一撃を

加える様子が
見えていたので、
驚いていた。

しかし、その事に
気づかないアマジは、

自分がその少女の
倍以上の身長があるので

「ふん。だがな、
お嬢ちゃん…

ちっちえー子供が、
孫の手一つで、
大の大人に
勝てる訳ねえだろ。」

そう言って、

少女を
見^み下^おろすと…

少女は、頭にかぶった
麦ワラ帽子のツバを、

また右手の人差し指の
指先で、

クイツ…と、上げて

「そうですか？

だって、お兄さんは、
もおすでに、

フワリの魔法に

かかっているんですよ」

そう言つて紅い目で

アマジを見上げると…

アマジは、

「お兄さんなんて

ご機嫌^{きげん}とつても手加減^{てかげん}は…
何!？」

いつの間か自分の…前、

うしろ、右横、左横と、

四方向に…

同じ姿の少女が

立っている事に気づく…

アマジ

「四人に増えただと？
残像か？」

いや、違う。これは…」

そう話す、

アマジの様子が

おかしい事に気づいた

元詐欺犯は、

「おい！どうした！
アマジ！！おい！」

何かを思い出すような
顔で遠くを見ている

アマジに

何度も声をかけて・・・

そのあと、

黄緑色の服と同じ色の
スカートをはいた少女に
視線を移し…

元詐欺犯

「このガキ！アマジに
何をしやがった！」

…と叫ぶと、

薄い桜色がかかった
白髪が肩までとどく
くらい長い

その麦ワラ帽子を
かぶった少女は、

「あの、お兄さんは、
魔幻想曲の世界の中で、
自分自身と
向き合っているのです。
そして、わるい人さん、
あなたも……。」

そう言つて、
右の中指と親指で、
パチン！と、音をたてる

すると…元詐欺犯は、

「まさか、
指パッチン

とはな…。

確かに良い音おと

してると思うが…
それがどうかしたか？」

左手に孫の手を持った
少女に尋ねるとたず

…その小さな少女から、

「まわりを見て、」

そう言われたので、

元詐欺犯はまわりを見る

すると・・・

「何？空中に光の文字が
浮かぶだと？」

しかも、その光の
文字や、記号は、

立体魔法陣のように

円周に

元詐欺犯のまわりを
かこ囲みこむが

よく見るとそれは、

元詐欺犯

「がくふ楽譜？」

そう・・・元詐欺犯の

言うように、それは、

立体魔法陣型《りつたい

まほうじんがた》の

楽譜だった・・・。

元詐欺犯がそれに気づくと…

麦ワラ帽子をかぶった
少女は、

「そうです。

これが、フワリの作った
魔幻想曲の三次元楽譜。

わるい人ひとさんは、今

フワリの作った

結界けっかいの中に

閉じ込められたのです」

つまり、

フワリの勝ちです…と、
詐欺犯に

勝利宣言《しょうり
せんげん》する。

しかし、元詐欺犯は、

「まだだ！

お前をやつつければ、

この変な空間も！」

…と少女に向かって走り
右拳で殴りかかるが

拳こぶしが

少女の顔に、

とどこうとした直前で

少女

「無駄です……。」

赤いくつを履いた

少女は、

残像を

残しながら…

まるでスケートのように
地の上をすべる事で

まるでその少女自身も
残像であるかのように…

右拳を放つ、

元詐欺犯の身体を

真正面からススくと、
すり抜け

元詐欺犯の背後に立つと

少女

「これは、「残像流歩」

魔法か武道を知らない

フワリを

捕まえる事は、

出来ません……。」

そう言って…

さらに少女が

「そして、「雪幻夢想」」

再び^{ふたたび}

右の中指と親指を使って
パチン！という音を
出した時・・・

元詐欺犯の頭に
電気のようなものが走り

それと同時に、目の前が
一瞬^{いつしゅん}
真^まっ暗になる…。

そして・・・
再び開いた^{ひら}
元詐欺犯の目には…

「雪が・・・
降^ふっている…。」

そこに少女の姿は無く
ザクッザクッ・・・と、
両足に履^はく靴で
踏みしめられるほど、
たくさん雪が
降り積もっていた…。

そして、元詐欺犯は、

いつの間にか自分の両手に灰色の毛糸で作られた
手袋てぶくろが

はめられている事に気づき...

「くそつ、なんだ？」

なぜか雪ダルマが

作りたくて作りたくて、
しょうがない・・・。」

欲望よくぼうの

赴おもむくままに

雪ダルマを作り始めるが

その時、元詐欺犯の耳に

（なんだ・・・小鳥の

さえずり声のような

綺麗きれいな声で、

誰かの歌声が

聞こえてくる・・・

この声は・・・）

【元曲た母さん、お肩を
叩たたきましょう】

…ゆきだるまを

つくりましょう・・・

りんとんたん・・・

りんとたんたん・・・
て〜ぶ〜く〜ろでつくり
ましよう〜・・・

りんとたんたんりんとたん・・・

雪を、手袋はめた両手で

ころがしているうちに

元詐欺犯の頭の中に：

子供だったころの

純粋な

思い出が

蘇よみがえってくる

元詐欺犯

（あのころは・・・

こんな事も、楽しくて

仕方なかった…。

なのに、いつからだろう

いろんなものが、

つまらなくなってしまったのは…

いや・・・違う。

つまらなくなったのは、

オレ自身か・・・）

りんとたん〜と、

雪の世界に流れる少女の

歌声うたごえは：

元詐欺犯の

汚よごれきつた

欲望を子供だったころの

純粹なものへと、
変化させていた・・・。

子供だったころの

純粹な気持ちを

呼び起こす魔法・・・

それこそが

魔幻想曲の一曲

「雪幻夢想」なのである。

そして、現実世界では…

麦ワラ帽子をかぶった

少女が、

魔法がかかっている

状態じょうたいの

アマジと

元詐欺犯を見つめ…

「このお兄さん達が

幻想世界を見ている

時間は、

あと、九分くらいかな…

そのあいだに、なんとか

ポチをつれださないと」

そう言つて、

うつ伏せに倒れている

ポチの方に

視線を移うつすと…

少女

「へみゅ〜・・・
おぶっていく
しかないよ〜。」

さっそく実践だ…と、
いわんばかりに

左手にもった孫の手を、
立つたまま
遠くを見ている
元詐欺犯達の近くに
置いてから…

そのあと・・・
うつ伏せになっていた
ポチを背負い^{せお}

「にゅおおー！
お…おもい・・・」…と

自分の両肩の上に
ポチの両腕を乗せると、
背負ったポチの両足を
ズルズル・・・と、
ひきづりながら

「うんしょー！うんしょー！
…と、

自分の家まで歩くのだった…

【Bパートへ続く】

第3話【小さな魔法使い】Aパート（後書き）

ここで、この世界の
特色などを一つ、
紹介します。

記憶の継承

この世界の魔法使いは、
魔法を使って、
自分の記憶の一部を
相手に
移植《うつす事》が
出来る。

その情報量などは、
波長が近いかどうか・
など、
いろいろな条件などが
あるが、国によっては、
両親の記憶の一部を
写す事を
伝統としている事
があるらしい・・・

ジパングでは、
一般的に
師匠が
弟子に
魔法や剣術と

いったものの知識を、
理解させるための
方法として、
使われている・・・。

第3話【小さな魔法使い】Bパート

その村には、
見覚えがあつた…。

藁^{ワラ}や木で
作られた、多くの家に…
村を囲^{かこ}む、
森と呼ばれるたくさんの木…

その光景を見て
コボルトであるはずの
ポチの両目に
涙があふれていた…。

ポチ
「不思議なものだな…
父^{かた}さんと夢を
語^{かた}った、
この場所が…
今のオレにとつての
夢になるなんて…」

その村の大地に
膝^{ひざ}を
抱^{かか}えて
座^すり込み
過ぎ^すさつた
思い出にひたっていると

そこに…

????

「素敵な村・・・

ここがポチの

夢の場所なんだね・・・。」

肩までかかるくらいの

薄い桜色がほのかに

混ざった白髪まの

少女が…

いつの間にか

ポチの前に立っていた…

そして・・・

「でも…」…と、

水色の羽衣はろも

を着た、その少女は…

さらに…

少女

「でもポチには、

フワリと一緒に

未来に夢をみてほしい…

だから…だからね、ポチ

フワリと一緒に

ポチの村を・・・

新しい番犬族の村を
作っていいこう・・・ね？
フワリがんばるから！」

頭のうしろに青い大きな
リボンをつけた、
その小さな少女は、

そう言つて…

ポチに左手を差し伸ばす

その少女が誰なのか…

ポチは、知らない・・・

ポチ

（知らないはずなのに・・・何だ？

押しつぶされそうに

なるほど、胸が・・・

痛い・・・）

切なくて、悲しい…

誰かの面影が…

一瞬、その少女と
重なりかさ

ポチ

（そうだ…昔、誰かに

こんなふうに手を

差し伸べられて、

オレは・・・）

そこで、差し伸ばされた
手を取ろうと

右手を伸ばした時・・・

そこで…ポチの夢が、
途切れてしまった…。

~~~~~

目が覚めて、

外は、夜・・・

電気の光が照らす

真っ白な部屋の中で…

ベッドの上に寝ていた  
自分の上に、

かけてあった布団を  
起きる身体の上半身と  
一緒に上げると・・・

ポチは、なぜかそこで  
何者かの気配を感じた…

ポチ

（間違いない・・・

誰かがオレを

狙っている…）  
（ねら

そして、次の瞬間！！

何者かが！？

「ポチー！

めがさ\*\*\*\*\*」

ポチの身体を狙って、  
飛び込んできた！！

ポチ

（フライングボディプレスだと！）

そのプロレス技に  
対抗するために：

飛びかかってくる、

その何者かに向けて…

右拳を

放ち！！

その小さな影は、

「きゃん！」…と、いう  
叫び声と共に

後方へ

吹き飛ばされた！！

しかし・・・ポチは、

自分の右拳にぶつかった

何者かの

感触が

(むにゅん、としていた)  
ものだから…

「まさか！」

ポチを  
襲<sup>おそ</sup>った者が、  
吹き飛ばされた方向へ  
目を向けると・・・

そこには…小さな少女が  
横になつて、  
倒れていた・・・。

ポチ

「子供・・・という事は、つまり・・・」

ポチの頭に幼児虐待<sup>ようじにせやくたい</sup>という  
言葉がよぎる・・・。

ポチ

「いかん！早く  
救急車<sup>きゅうきゅうしゃ</sup>を呼ばないと・・・」

…と、ポチがベッドから  
離れようとした時・・・

少女

「いきなり、ぱんちは、

ひどいよ。ポチ・・・」

黄緑色の服と同じ色の  
スカートをはいた少女が  
何事もなかったかの  
ように起き上がり・・・

それを見たポチが、まだ  
ベッドの上に  
座ったままで・・・

ポチ

「いや…ゴメンゴメン。  
てつきり

フライングボディプレスで…  
飛びかかってきたものだと思ったから・・・  
本当にゴメンね…」

…と、

両手をついて、  
あやま  
謝ると…

少女は・・・

「じゃあ、許したげる」

そう言って、

それを聞いて…

「はや！」・・・と、  
思わず口に出すポチに…

少女は、

「だって、いつまでも  
怒ったって、

しょうがないし・・・

それで、その、

ふらいんぐ・ぼでー

びゅれす…って、

なーに？」

・・・つまり、

フライングボディプレス

についての説明を

求めてきたので・・・

ポチ

「身体を使つて、

相手に飛び込む

プロレス技の事さ…

つまり、

ボディアタックの

事だな・・・」

…と、

ポチが説明すると…

少女が

「ぼ…ぼでーあたくし！

そそそんな、

だいたんな事フワリは、

しないよ！」

…と、

頬を

うすべにいろ

薄紅色

に染めて・・・

そんな顔の前を

広げた両手で、

ブンブン

横に振りながら

おこ

驚いた声を

あげるので

ポチは・・・

「????どうして、

そんなに驚いた声を

あげてるんだ？」…と、

たず  
尋ねると…

少女は、

両手の人差し指の

指先同士を

くつつけながら

「だって、

少女マンガとかで

見てるけど・・・

しゅ…しゅごいんだもん

アレ・・・」

そのあとは、  
ゴニョゴニョとしか  
言わないので

ベッドの上で、ポチは、

（最近の少女マンガって  
プロレス技が  
出てくるのか？）

それは、確かにすごいと  
感心するのだった・・・。

そして、一時間後・・・

ポチが、布団を出て、

その女の子の部屋の  
テーブルの前に  
せいざ  
正座  
していると・・・

一度、部屋を出て・・・  
他の場所に行っていた、  
女の子が、

あたた  
少し温めた



ミルクを入れた

マグカップと、お皿を

乗せたお盆を

両手に持って、

部屋の中に入ってきて…

ミルクを入れたお皿は、

ポチの前に…

マグカップは、

自分のところに

それぞれ置いて…

ポチの向かいに正座した

そこで、ポチは、

正座したその少女が

コボルトである自分が

飲みやすいように…

わざわざミルクを、

お皿に入れてくれた事に

気がつき

ポチ

「そういえば、なんで

君は、

オレの名前とかの事を

いろいろ

知ってるんだ？」

その事について尋ねると

薄い桜色がほんのり

混ざった白髪が、

肩まで

とどくくらい長い

その少女は、

「それは、フワリが  
魔法使いだからだよ。」

そう言うので、ポチは、

（やれやれ・・・  
やっぱり、あれは、  
ただの夢だったか・・・。）

ハアッ...と、  
ため息を吐くと・・・

頭のうしろに青く大きい  
リボンをつけた  
そのフワリという少女は

「むうつ・・・  
信じてないなポチ...」

と、  
頬を  
膨らませるので

白いジャージを着た  
ポチは、

「あつ・・・いや・・・  
信じてるさ・・・」

そう言いながら、  
頭の中では...

（最近、魔法のおもちも進化してきて、  
見た目からは・・・  
本当に魔法を使ってるようにも、思えるからな・・・）

そんな事を  
思っていたせいか

少女に

「むむむつ、  
やっぱり信じてない」

・・・と、  
見やぶられてしまい・・・

それから、少女は、  
「よし！

じゃあ、信じさせただけ・・・  
・・・あり？」

そこまで言って、

黙ってしまったので

それを、

テーブルの向かいから  
見ていたポチが

「どうした？」

…と、

同じように正座していた  
少女に聞くと…

少女は・・・

「フワリ、まだ説明とか  
ヘタで、上手<sup>うま</sup>く

言えないから・・・

そうだ！

いっしょに公園に行こう  
ポチ！」

思いつきなのか・・・

突然そんな事を  
行ってきたので

ポチが・・・

「本当、いきなりだな」

そう言つと、

黄緑色の服と同じ色の  
スカートをはいた

その小さな少女は、

様子を

うかがうように

ポチを見てから…

「ごめんなさい・・・

でも、フワリのお友達に

そういう説明が

得意な子がいて、

ついでにポチに

その子を紹介できて、

いつせきにちよくだし…

だから公園なら、

その子とポチを

合わせるのに、

ちようどいいと

思ったの…」

そう言うので、

ポチは、テーブルの前で

正座しながら…

「公園に行くのは、

いいが・・・

その子の予定とかは、

大丈夫なのか？」

…と、

少女に話すと、

その少女は・・・

「うん。だいじょーぶ、だいじょーぶ。」

…と、言ったあと・・・  
立ちあがって、

少女

「行こ。ポチ。」

そう言いながら、ポチに  
左手を差し伸ばすので…

ポチは、右手で

その少女の

左手を取りながら

立ち上がり、頭の中で、

（ひょっとして、もう

連絡をとって

いるのか？）

そんな事を思いながら、

紅い目をした、

その少女のあとに

続いて・・・

少女の部屋を

出るのだった

それから・・・

出会った少女の

部屋を出たポチは、

少女の家の一階へ降りて  
げんかん  
玄関の

ドアから外へ出ると、

その女の子と一緒に

少女が言う

公園みたいなところに

向かって歩いていた

それから、ポチは、少女に…

「フワリはね・・・  
雪音〓フワリって、  
いう名前なんだよ。」

…と、  
少女の名前を  
教えてもらい…

ポチ  
「ふわり・・・って、  
どう書くんだった？」  
…と、

ポチが、その少女の  
名前について  
尋ねると…

少女から

「カタカナでフワリって  
書くんだよ。」

…と、

説明をうけたので、

歩きながら…ポチは、

「ジパング人なのに  
漢字の

名前じゃないのか？  
けしからんな、  
それは！」

カタカナの  
名前だった事に  
怒ってみると…

ポチの右隣を  
白い靴で  
歩いていた…  
フワリという、  
その少女が

「フワリの名づけ親を



悪く言っちゃダメだよ。  
ポチ」

そう言つて、チラリと  
ポチの方を見上げるので

白いスニーカーで  
歩いていたポチは、  
一瞬、フワリの方を見て

「あつ、いや…ゴメン」

フワリに謝つて、  
再び前に視線を戻すと、

モミアゲと呼ばれる  
耳の前の髪が  
肩までとどくぐらい長い  
フワリが、

「じゃあ、許したげる」

そう言うので…  
ポチは、  
そんなフワリに

「なあ、フワリの家には  
親がいないのか？」

悪いとは、思いながらも

気になっていた事を  
聞くと…

フワリは、前を見ながら

「うん。フワリは、なぜか  
お父さんやお母さんが  
いないらしくて…

おじいさんと、  
おばあさんに育てて  
もらったの…。

けど、おばあさんは、  
フワリが三歳のころに  
死んじゃって…

おじいさんも一年前に」

少しだけ、暗い影を  
落とした表情をする  
フワリに…ポチは、

「そうか…すまないな。  
デリカシーとかなくて」  
…と、

歩きながら…謝ると、

その隣を歩くフワリは、

「ううん」…と、  
ブンブン首を横にふり

そのあと、歩きながらも  
ポチの方を見上げて

「だからね・・・

フワリは、

ポチに会うのを

とっても、とおっても、  
楽しみにしてたんだよ」

「とおっても、」と、

言うところだけにだけ

一瞬<sup>いつしゅん</sup>

両手を広げて<sup>ひろ</sup>…

そのあと、

うしろに両手を組んで  
歩きながら、

ポチを見上げる・・・。

その紅いクリクリした  
両目に見つめながらも  
ポチは、

そういえば…と、今、  
自分が置かれた立場を  
冷静になって、考え…

ポチ

「なあ、それでオレは、  
どうすれば  
良いんだろう？」

そんな事を歩きながら、  
言うので、フワリは、  
不思議そうな顔で

「えっ？

このままフワリと  
暮らせば……」と  
言うと、

白いジャージを着た

ポチは、

「捕まるだろ  
普通……」

ポチ

（何も知らない人から  
見れば……  
赤頭巾の

家に

オオカミ  
狼が

住んでいるように

思われても、

しかたないもんな……）

このままいけば、

警察の

逮捕の

対象に

なる事を告げて、

さらに・・・

ポチ

「それに…このまま、  
うまく二人で生活  
できたとしても…  
お金は・・・ん？」

そこでポチは、

（そうだ！？この子…  
せいかつひ  
生活費は

どうしてたんだ・・・）

その事に気がついて…  
歩きながら、フワリに

「なあ、フワリは、  
今までどんな生活を

していたんだ？」

…と、

聞いてみると、フワリは

「今、言っても  
いいんだけど・・・ほら  
公園が見えてきたから、  
あの子にまかせるよ。」

両手をうしろに  
組んだまま…

エヘッと、ポチを  
見上げながら  
笑いかけてくるので…

ポチは、そんなフワリと  
一緒に歩きながら

（また、あの子か…  
どんな子なんだろう…）

そんな事を考えつつ…

公園らしきところの中へ  
足を踏みいれるのだった

・  
・  
・  
・  
・

月の青い光が、  
夜空を照らす中…

公園こうえんにいた

ポチとフワリは、  
その光が一番強い場所で  
立っていた…。

ポチは、まわりを  
キョロキョロと  
見渡みわたしたあと

「それで、フワリが  
言っていた子って、  
一体どこにいるんだ？」

…と、

自分の前にいるフワリに  
聞いてみると、  
フワリは・・・

「ちょっと待っててね。  
今、呼び出すから…」

そう言って、目を閉じる

それを見て、ポチが

「おい・・・」…と、  
声をかけようとした時、

ポチの3メートルくらい  
前に立って、  
目を閉じたフワリが、

「鈴鹿<sup>すずか</sup>ちゃん」…と、  
誰かの名前を呼ぶ。

すると、どうだろう・・・

ヒュウウウー…と、  
フワリの前に風が吹き…  
風に吹かれてゆれる

白い髪が毛先から

徐々《じょじょ》に

青く輝く<sup>かがや</sup>

黒髪へと変化していく…

そして、紅い色から

紫色へ<sup>むしなまきいろ</sup>

変化した両目が

閉じていたところから、

ゆっくりと

開かれた時<sup>ひら</sup>…

そのフワリであつて、

フワリではない誰かが、

「<sup>おっ</sup>応じたぞ。」

…と、

前に呼びかけたフワリに

答えて、

そのあと、ポチを見る。

それを見たポチが

「え？・・・」・・・と、

かける言葉を<sup>うしな</sup>  
失っている

その紫色の目をした  
少女は、



「始め<sup>はじ</sup>まして・・・かの？  
鈴鹿<sup>もっ</sup>と申す。」

ほがらかな

フワリの声とは、

あきらかに違う...

透<sup>す</sup>き通った声で

よろしくの・・・と、

ポチに言うのだった...

【4話へ続く・・・】

### 第3話【小さな魔法使い】Bパート（後書き）

#### 次回予告

フワリの身体を  
うつつわ  
器にして突然  
あらわ  
現れた  
すずか  
鈴鹿という  
少女。

かつてジパングに  
存在したといわれる、  
てんによ  
天女が  
かた  
語る  
ムニモシュネーと  
呼ばれる者の  
もの  
宿命、とは…。

#### 次回、第4話

##### 【舞姫】

前世・・・それは、  
かつての人格と存在を  
呼び戻す  
ひみつ  
秘密の  
かきおと  
鍵音・・・

## 第4話【舞姫】Aパート

外出する前：

電気がついた

フワリの白い部屋の中

ほんのり桜色に

染まった肩にとどく

ぐらいの白い髪をした

少女フワリは、

「これを、

フワリのお友達に

渡してほしいの…」

そう言つて、

左手に持った

扇子せんすを

ポチの右手に手渡すと、

ポチは、

右側みぎがわの

ポケットに、

その扇子をしまい

ポチ

「なあ、これって  
何かに

必要なものなのか？」

…と、話すと、

フワリは顎あごに

右手の人差し指をそえて  
考え込み

フワリ

「うーん。

必要なのかな？

どうなのかな？うん

必要だよ。きつと」

そう言つて、

ポチ

「はあ…」

ポチを

混乱させるのだった…

そして…それから…夜、

公園らしき場所に

外出したポチの前には…

公園らしきところの中に  
立っていた、

百八十センチ近い身長を

したポチは、

夜空に輝く<sup>かがや</sup>

月の光の下で、

紫色の目で

ポチを見つめる、少女に

ポチ

「き・君は、一体：」  
と言いながら、頭の中で

（二重人格？

いや・・・それでは、  
<sup>すがたかたち</sup>  
姿形が

違う事の説明がつかない  
・・・だとしたら・・・  
これは・・一体・・・  
なんなんだろう・・・と  
考えていると・・・

肩までとどくぐらいの

青く輝く黒髪をした、  
<sup>すすか</sup>

鈴鹿と

呼ばれたその少女は、

「まあ、待て・・・

まずは、そのジャージの

右のポケットから

はみ出ている

赤色の扇子<sup>せんす</sup>を

妾<sup>わらわ</sup>に渡して  
欲しいのじゃが…。」

そう話しかけて来たので

白いジャージを  
着たポチは

「あ…ああ…  
そうだったな…。」

鈴鹿という黒髪の少女に  
近づいて…。

右のポケットから右手で  
取り出した扇子を…

もみあげという  
耳の前の髪が…肩まで  
とどくくらい長い…  
その少女の左手に  
手渡<sup>てわた</sup>したあと

また、うしろに下がって  
1メートルくらい  
距離をとると、鈴鹿は、

「かたじけない…。」

フワリとは、違った

落ちついた声で、  
ポチに、お礼<sup>れい</sup>を  
言ったあと、

鈴鹿御前

「聞きたい事は、  
わかっておる……。  
妾<sup>わらわ</sup>とフワリの  
関係についてであろう」

そう言って、  
それに対して、ポチが…  
コクリと首を  
縦<sup>たなず</sup>に振<sup>ふ</sup>って  
頷<sup>うなず</sup>くと、

鈴鹿<sup>すずか</sup>は、

「では、話すでしょう」  
…と、  
長い話を始めた…。

鈴鹿御前

「ポチ<sup>どの</sup>殿は、  
最後の竜<sup>りゅう</sup>という話を  
存<sup>ぞんじ</sup>知<sup>し</sup>て  
おるか？」

ポチ

「ああ・・・知ってる。  
メテオによって大災害を

受けた時に…生き残った  
唯一の竜で、確か、

そのあと、人間の

先祖に魔法を

伝えた

といわれてるんだよな…」

ちよつと自身なさげに  
答えるポチに、鈴鹿は、

「そうじゃ。しかし…

その話には、

異説もあるのを、  
ご存知か？」

そう答え、ポチが

「ほう・・・どんな？」

そう聞くと、

鈴鹿御前

「あの時、最後の竜は、  
肉体が滅んで

しまった・・・と、  
申す話じゃ…」

それは、驚くべき話

だったが・・・

ポチにしてみれば



（まあ・・・歴史は、

事実では、ないし・・・

証拠しょうこが

あれば・・・

ほかの仮説かせつを

たてるのもあり得える。

それより…

気になるのは・・・）

そう考えたポチが、

「その仮説が、

君とフワリと、なんの

関係があるんだ？」

その事を聞くと・・・

鈴鹿は、

「最後の竜には、

肉体が滅ほろびても

記憶きおくを残す

すべがあつたのじゃ。

それは、かつて竜達そらが

宇宙から来た者達と、質の良い

カーバンクル《竜の脳の中にある紅玉の事》を

集めて作った

ドラゴンオーブと申すものでな…

そこに、

自身の記憶<sup>きおく</sup>を  
残<sup>のこ</sup>したのじゃ」

そこまで聞いて、  
ポチは、ある事に  
気がつき…

ポチ

「ちよっ…ちよっと待て  
それじゃ、最後の竜って  
・・・まさか！」

鈴鹿御前

「そう…今、そなたの  
考えておる通<sup>とお</sup>り  
ドラゴンオーブ  
そのものが最後の竜と  
呼ばれておったのじゃ」

その話<sup>お話し</sup>にポチは、  
驚<sup>おどろ</sup>いたが、  
今は、それより・・・

ポチ

「それで、その  
ドラゴンオーブとやらが  
どうやって、君達と  
関係<sup>かんけい</sup>してくるんだ？」

気<sup>き</sup>になっている事を

聞くと、鈴鹿は

「かつて世界がケムダーの脅威きょういに  
さらされた時、

ある天才がドラゴンオーブの力ちからを使って  
フェニックスシステムと

いうものを作った・・・。

それは、ドラゴンオーブの力やどを宿した  
フェニックスシステムに

九人の人間の魂を

移植させて、

例え何度たと

その人間達が滅んでも…

その魂に、

適合てきごう

する肉体があれば…

ほぼ同じ記憶と強さを

宿す事ができる

ようにしたのじゃ…。

そして、永遠えいえんに近い時を生きる事が

出来たその九人は、

やがて…

ケムダーをしのぐ、

力を得て、ケムダー達を

滅ぼす事が

できたのじゃ。」

鈴鹿はなしの話を

そこまで聞いたポチは、

（ちょっと待て！

それじゃあ、

まるでオレの村を  
焼<sup>や</sup>きはらった、

あの悪魔と同じ

じゃないか！）

昔の事を思いだしていると…

鈴鹿から

「???どうなされた？」

…と、

聞かれたので、ポチは、

「いや…なんでもない。

それで、まさかフワリが  
そのバンパイアみたいな  
存在だって、言うんじや  
ないだろうな？」

まさか…と思いながらも  
その事を聞いてみると…

やはり、鈴鹿は、

一瞬目を閉じてから、

首を一度だけ横に  
振<sup>ふ</sup>って…

そのあと、  
ポチを見ながら

鈴鹿御前

「さあの・・・

少なくとも妾は、

そのころの記憶が

ないから、わからぬが…

妾達のもつとも

古い記憶をもつ者が、

ミューズクレイオと

呼ばれる永遠の記憶を

持つ存在だと、

当時の人々に

告げられておるし…

それに・・・」

鈴鹿が途中で、

止めた言葉をポチが

「それに？」・・・と、  
繰り返すと…

鈴鹿御前

「それに、それから、

約四千年のあいだ・・・

千年ごとに

生まれ変わっている

という記憶が妾達の中に

確かにあるのじゃ。」

そう言われて、ポチは、

「ちょ… ちょっと待て！  
つまり、フワリの中には  
君のほかに、あと三人の  
前世の人格があるのか？」  
そう言くと、鈴鹿は、

「その通りじゃ。」

やはり、そう答え、  
そのあと、さらに・・・

「そして、  
5人の妾達は、  
ずっと誰かを  
捜<sup>さが</sup>しておった」

そう言うので、ポチは、

「それがオレだって  
いうのか？・・・って！  
ちょっと待て！？」

じゃあ何か？  
前世のオレも  
コボルトって事が！」

その事に気づいて、  
ショックを受けていると…

それを見た鈴鹿は、

一瞬口元を右手で  
触れて、クスツと笑って、

「そのようじゃの…。

そなたは、ずっとフワリが想像しておった  
通りの者だったので…

わらわ  
妾も驚いたぞ

しかし・・・

そなたに対しての  
記憶は、

どうやら妾達の

前かがの方の記憶に

関わりが

あるようじゃ・・・。」

そう言うので、ポチは、

「四千年以上も前の記憶

なんて想像もつかないな。それより、やっぱりほかの前世の人にも

意識が

代わると君みたいに

すがたかたち  
姿形が

変わるのか？」

…と、話すと・・・

鈴鹿御前

「うむ。

そうじゃな・・・  
しかし、そなたが  
思っている事とは、  
たぶん、違うと思うぞ」

左手に持った  
赤い扇子せんすを  
そこでバツと広げて  
それで口元を  
隠かくしながら  
鈴鹿すずかは、

「ポチどの殿が、  
たぶん今、  
思っている事は、  
妾じゅつが術で  
げんかく  
幻覚たぐいの  
類を  
見せているからでは、  
ないか？・・・と、思っ  
ておるのだろうか・・・」

・・・と、そう話し・・・  
そこで、

ポチ  
「違うのか？」

・・・と、話すポチに・・・



鈴鹿は、口元から  
離しつつ広げた扇子を  
閉じると、  
ポチに、

鈴鹿御前

「見ておれば分かる」

そう言つて、スウツ…と  
目を閉じて、

また目を

開くと…

なんと！そこで紅い目を  
持つフワリの姿になつて  
いるではないか！

鈴鹿御前

「このように妾も

他の人格も

他の人の目に入る光を

利用し・・・別の姿に

見せる事ができるのじゃが問題なのは、

人格の方で、妾は、

月の光の力を

借りないと、

出現する事が出来ぬし…

他の人格にも、  
条件が

そろわなければ、  
出現しないレアな者もある…  
しかし…変じゃの?」

ポチ

「変?」

ポチがそう言うと、  
フワリの姿をした  
鈴鹿は、

「フワリには、  
無条件に出現できる  
二つの人格が、  
あるはずじゃが…ぬっ!  
そうか!  
そういう事か!」

そこまで言っおいて、  
フワリの姿をした鈴鹿は  
話を中断  
してしまったので…

気になったポチは

「????そういう事?」

…ってなんだ?と、  
聞くと…

フワリの姿をした鈴鹿は

口元に

閉じた扇子の先をつけて  
紅い目を細めながら

「一人は、猫みたいに  
素直じゃない奴じゃし…

もう一人は、

ゆいいつ  
唯一の

だんし  
男子の

人格であるので…  
むかしはなし  
昔話

などが得意な妾に  
まか  
任せた方が

良いと考えたのじゃ…。

頭の中は、そなたの事で  
いっぱいじゃからの。

あの雪うさぎは…」

そこまで、言つと…。

人格が変わつたのか？  
とっぜん  
突然

口元から離れた

左手と、右手を、

ガツポーズのように  
にぎ  
握りしめて、

「ちよつと！

鈴鹿ちゃん！！」

頬ほを

うすい紅色に染めながら  
違う声で少し高い声を  
あげるので・・・

その時、確かに  
フワリだった・・・

フワリの姿をした鈴鹿は

再び左手に持った  
扇子の先を口元に  
近づけて・・・

「そう、照てれるな  
真まことに

可愛かわいいのう、  
雪うさぎは・・・」

そう言つて、口元から  
扇子を離してから、

スウッ…と目を閉じて  
元の黒髪くろかみの姿に戻ると…

目を閉じたまま、ポチに

「他にも、光を  
利用して、こんな事が  
できるのじゃ。」

そう言つて、  
姿を消したり  
そして、また視界に  
現れたと思えば、

肩までとどくぐらいの  
長さだった黒髪を  
背中まで  
伸ばしてみたり

…と、ポチを驚かせたが  
むしろ本当に驚いたのは  
そのあとの事で…

髪を伸ばしたままで  
目を開いた鈴鹿は、

バツと広げた  
左手の扇子せんすを  
また口元に近づけ

「それで、そなたが  
一番聞きたがつていた  
生活費せいかつひを

どのような方法で、  
稼いでいるか…  
についてじゃが…  
それは…妾達  
ミューズの存在  
そのものに

関<sup>か</sup>わる事  
なのじゃ…。」

そう言つて、開いていた  
紫色の両目を、また、  
スウツと、  
閉じると…。

鈴鹿の身体のまわりに…  
月の光にも似た  
3センチから  
5センチくらいの  
青白い光が、ボツボツと  
千にもときそうな数で  
たくさん  
浮かび上がってくる…

ポチ  
「こ…これは…。」

驚<sup>おどろ</sup>くポチに、  
紫色の両目を  
開<sup>ひら</sup>いた鈴鹿は…

「ある方法を  
用<sup>もち</sup>いて…。  
これらの救われない  
迷<sup>まよ</sup>える魂を

正しき方向へ  
導く……

それが妾達、ミュージズが  
存在するもう一つの  
理由であり……

フワリの仕事にも  
関わる事

なのじゃ……」

透き通った

綺麗な声で

そう告げるのだった……。

【Bパートへ続く……】

#### 第4話【舞姫】Aパート（後書き）

電気がついた

白いフワリの部屋の中

少し前：そこでポチが

テーブルの前で

正座しながら・・・

テーブルの上に置かれた

お皿を両手にとって、

その中にはいった

ミルクを犬のように

ペロペロと舌で

すくって飲んでいた…。

その様子をテーブルの

向かいで正座しながら

見ていたフワリが、

左手で口に近づけた、

ミルクの入った

マグカップをテーブルに

コトンと置いて

フワリ

「やっぱり、

その飲み方が

落ち着くのか？」



…と、

尋ねると、

ポチは、

一回両手に持った皿を  
テーブルに置いて

「ああ・・・

コボルトだからな。

なんていうか…身体の  
構造が

人の時とは、違うんだ」

そう答えたあと

また、両手にもった皿を  
顔の前まで持ってきて、

犬のようにペロペロと  
舌で皿の中のミルクを  
すくうので、

フワリが

顎の方に…

右手の人差し指の指先を  
つけて

「じゃあ…フワリには、

ポチみたいな

飲み方は

できないの？」

…と、話すと…ポチは、

「出来たとしても…

お願いですから、

それは、止<sup>や</sup>めて

ください。」

オレと同じ飲み方は、

駄<sup>だ</sup>目<sup>め</sup>です…と、

丁寧<sup>ていねい</sup>語<sup>ご</sup>で

頼<sup>たの</sup>む<sup>の</sup>だった。

f i n

## 第4話【舞姫】Bパート

月の青い光が夜空に  
輝く

公園らしき場所の中で、

頭のうしろの方に

蝶結び

にした

青い大きなリボンをつけた

鈴鹿という少女の身体の

まわりに・・・

千にも、

とどきそうなほど多くの

青白い光が

浮かび上がっている…。

その光の大きさから、

たくさんの

蛍の光が

浮かび上がっているようで…

少しのあいだ言葉を

忘れて、鈴鹿を見ている

白いジャージを

着たポチに・・・

そこから

1メートルくらい離れた  
場所に立つ、  
背中にとどくくらいの  
長い黒髪をした鈴鹿は、

「命ある世界には、  
どの命にも、かならず  
魂<sup>たましい</sup>という

光<sup>やど</sup>が、宿り、

死ねば、その魂は、  
また別の命に宿る。

・・・しかし、中には、  
悪事<sup>あくじ</sup>などに

身を染そめて、この地に  
さまよう魂も、確かに  
存在する。」

それが業<sup>ごう</sup>・・・  
カルマとも  
呼ばれるものを  
宿した魂だと…

説明する鈴鹿に、ポチは

「つまりは、今、  
君のまわりにある  
たくさんの小さな光が  
その、さまよえる魂だと  
言うわけだ・・・。」

そう話すと、

話すポチから、  
約1メートルくらい  
離れた場所で、  
鈴鹿は、

「そうじゃ。そして、  
その妾達の仕事と申すか  
使命は、

その悪事を  
働いた魂を、

他の魂と同じように、  
新たな  
器を

与えてカルマを  
解消  
させる事なのじゃ。」

つまりは、そうやって  
魂を、この世から  
卒業させる事を  
目的と、  
している事を話す。

それを聞いたポチは、

「なあ・・・それなら、  
その器つて、

つまり  
身体からだの事だろ  
その魂の器になる

身体って、

どこにあるんだ？」

そう言っただけ聞いてみると

白い靴をはいた

鈴鹿は、

「フワリの部屋の中に、

少し大きな

オルゴール箱が

なかったか？」

さっきまで左腰の横の方に下ろしていた

広げた扇子で

口元を隠すと…

その動作を（またか…）と

見ていたポチが

「あ・あ・あ、

見た事があるけど…」

そう答えるので、

鈴鹿は、

「あの中には、

一体の器が

入って

おるのじゃ。」

…と、

ポチに説明する。

すると、ポチは

驚いたような

犬の表情で

「うそおおくん！」

犬の遠吠えのように

声をあげたあと…

さらにポチは、

「いったい、器つて、  
どんな身体なんだ？」

…と、鈴鹿に  
尋ねるので

鈴鹿は、ポチから  
1メートル

離れた場所から

左手の方に持った、

広げた扇子で

口元を隠しつつ

「そうよなあ…

最近なら、あの

箱の中にある

人工妖精の身体や…今

流行りはやの…」

そこまで言っと、

ポチ

「まさか・・・  
M O E ドールか!？」

ポチが叫さけび声を  
あげるので・・・

鈴鹿は、広げた  
扇子せんすで口元を  
隠かくしたまま、  
クスツと笑って

「まあそう申すな。  
やはり、いつの時代でも  
気持ちのこもったものが  
一番なのじゃ。」

透すき通った声で、  
そう言っと・・・そこで

広げた扇子をパチンと  
閉とじて

「さて、もう夜も  
遅おそいし  
帰るとしよつかの…」



そう言って、  
身体のまわりにある

1000にもとどくほどの  
多くの青白い光を  
自分の身体の中に…  
フツと、  
しまってから…

ポチを連れて、  
帰ろうとした、その時！

鈴鹿御前  
「危ない！」

突然ポチは、背中を

左手に持つ扇子を  
投げ捨てた

鈴鹿の両手に押されて

前の方に、  
うつ伏せて  
倒れると…

そのポチの背中の上を  
五センチくらいの  
光の弾が、

ゴオツと

通り過ぎ<sup>す</sup>ていき

光の弾が飛んで来た方から…

「チツ…ミスったか…」

…と、

首にとどくくらいの

長さの金髪に髪を染めた

180センチくらいの

黒いジャンパーを着た

男が歩いてくる…。

すると鈴鹿は、

その男の右手に

はめられた

金属で出来た手袋の

ようなものを見て…

「やはり

マジックハンドか…」

そう言うと、今、

5メートルくらい離れた

場所にいる、その男は、

「そうだ。」…と、  
<sup>みじか</sup>短く答える。

マジックハンドとは、

充電する  
までに・・・

手の平の中にある  
発射口

から電気の力で  
約十発くらいまで  
魔法の弾が発射できる。

腕のまわりの部分は、  
ゴムでカバーしている  
金属製の手袋の事である

金髪に染めた男  
「今日は、これで  
七発目だが  
あと三発、残っている」

男がそう言ってる  
あいだに

鈴鹿は、腰をかがめて、  
左手で扇子を  
拾ってから・・・

背筋を  
伸ばして、男を見て

「教えてもらおう・・・  
なぜ？このような  
乱暴らんぼうを  
働く。」

本当に疑問ぎもんに  
思った声で、  
その事に  
ついて聞くと・・・

白いものを《ズボンの事》  
下の方にはいてる  
黒いジャンパーを着た  
男は

「えっ？  
だってコボルトと  
子供なんて、弱そうだし  
試し撃ためうち  
すんのに、  
ちようど良いだろ。」

そう言うので、  
そのあいだに地に  
うつ伏ぶせていた  
状態じょうたいから  
立ち上がったポチが、

「最低な理由だ」

ジパングには、なんで？  
こう…

人を批判したがる奴が  
多いんだと考えている  
あいだに

ザッ…と履<sup>は</sup>いてる  
白い靴で…

その手袋をはめた男の  
3メートルくらい前に  
立った鈴鹿が、

また、バツ…と、  
左手を振る事で  
持っている扇子を広げて

「そうなのか？

しかし、残念じゃの。

先ほどの攻撃で妾に

魔法を当てる

唯一<sup>ゆいいつ</sup>の

チャンスを、

のがしてしまっただぞ。」

そう言う…

そんな…人の言う事など  
気にせず髪を染めた男は

「あつ…そう・・・」

…と、

短く言いながら

右手にはめた金属製の  
手袋てぶくろの

甲《手の平の裏の事》の

ところにある【赤】【白】【青】と、横にならぶ

ボタンのうち

【赤】のボタンを

左手の人差し指の指先で

押して・・・。

その手袋の手の平を

鈴鹿の方に向けると

手袋の手の平の中にある

発射口のパワーを

シューシュー…と音を

たてながら

充電させていく・・・

そのあいだに鈴鹿は、

「ポチ殿！すぐに妾から  
離れるのじゃ！！」

ポチに声をかけて・・・

ポチをさらに

五メートルくらい、

うしろに

下さがらせると…

そのあいだに

マジックハンドの

パワーをフルパワーに

充電させた

髪を金髪に染めた

若い男が鈴鹿の方に

向けた手の平から・・・

「くらえええー!!」

3メートル前にいる

鈴鹿に向かって、

ボツ…ボッシュウウ!と

約5センチくらいの  
火球かきゅうを放つ

しかし、その火球は、

黄緑色の服を着た

鈴鹿の胸のところを、

スカッと通りすぎて・・・

そこにいる鈴鹿が、  
スウツ…と、  
消えたかと  
思えば・・・

その右側<sup>みぎがわ</sup>…  
あるいは、左側に<sup>あひだ</sup>  
現れては消え  
現れては消え…と

左手に持った扇子を  
使って舞<sup>ま</sup>いながら

右手にはめた手袋をさげた男を、  
瞬間移動<sup>しゅんかん</sup>のような  
ものを繰<sup>く</sup>り返し…  
円周<sup>えんしゅう</sup>に囲<sup>かこ</sup>むように

髪を染めた男  
「こ…これは・・・」

和琴<sup>わこん</sup>の音や  
横笛<sup>よこぶえ</sup>や  
楽琵琶<sup>がくひわ</sup>などの  
雅楽<sup>ががく</sup>の音楽と  
共に

黒い靴<sup>くつ</sup>と  
同じ色のジャンパーを  
着た男の目に



自分のまわりに

たくさんの光の花びらが

舞<sup>ま</sup>う

<sup>はなふぶき</sup>

花吹雪が

<sup>うつ</sup>

映る。

そこに瞬間移動のような  
ものを繰り返す鈴鹿から

「【幻視へげんしゝ瞬動】

人の目に映る光を

利用して・・・

ただの移動を、瞬間移動

しているようにみせる

<sup>わざ</sup>  
術じゃ。

そして…【心色情転】」

そこで、瞬間移動のようなものを辞<sup>や</sup>めて、

立ち止まった鈴鹿が

広げた扇子をパチン！と

閉<sup>と</sup>じると・・・

男のまわりを、

たくさんの光に染まった

<sup>はなふぶき</sup>

花吹雪が

吹<sup>ふ</sup>くところから…

男は、鈴鹿が

<sup>つむ</sup>  
紡ぎだす

幻想の世界へと入っていく…

そこには・・・

吹く風によつて

たくさん光の花びらを

舞い散らす、

大きな木だけがあり…

他には、何もなく、

夜空がどこまでも

広がっている・・・

大きな木があるところに

立っていた

髪を染めた男が

ふと、足元を見ると…

いつの間にかそこにいた

白い子猫こねこが

ニヤーンと、

男を見上げていた…。

いつもなら右手にはめた

金属製の手袋の手の平を

向けて・・・

光の弾や火の球をぶつけていたところだが・・・

髪を染めた男

「な…なぜ・・・

こんなに

この子猫が  
可愛く  
思えるんだ？」

なぜ？攻撃出来ない？と

不思議に思う男の

頭の中に直接、

響くように、

清んだ歌声が

どこから、

聞こえてくる・・・

~~~~~

元曲ドナドナより～

子猫が見てるよ

は～なふぶき～

ふ～いっている

キ～ラキ～ラひかあてる～

こ～ね～こ～が

ま～じまあじ

わ～たし～をみ～ている～

し～ろ～い～こねこ～

わたしをみ～てる～

きよとつとし～た

ひ～と～み～で

み～て～い～る～よ～

まじまじま～じまあじ～

こねこがみ～てる～

まじまじま～じまあじ～

めがはなせ～な～い～

そして・・・現実世界では
180センチくらいの男が
どこか遠くを
見つめながら
じっとして、動かないので…

5メートルほど
離れた場所から、
その様子ようすを
見ていたポチが、

「なあ、さつきから、
じっとしてて、
動かないんだけど・・・
何か幻覚げんかく
でも見てるのか？」

今は、となりに
立っている
鈴鹿たずに尋ねると

鈴鹿

「まあそんなところじゃ
さて、帰るとしようかの
ポチ殿どの・・・」

そう…ポチに言うので

ポチは、

「こいつは、このまま、

ほつといて

大丈夫だいじょうぶ

なのか？」

・・・と、

鈴鹿に聞くと、

長いモミアゲをした

鈴鹿は

鈴鹿

「心配ない。」

あと3分もすれば、

元に戻るはずじゃ。

それに、元に戻ったら、

違いの分かる男に

なっておるから・・・

もう襲おそわれる

心配もないはずじゃ。」

そう言うので、ポチは

「あ・・・ああ・・・。」

少し戸惑とまどい

ながらも、返事をする

鈴鹿は、

「俊宗様以来じゃな．．

こつやつて話すのは、

今宵^{こよひ}は、

家に着くまで

語りあかそうぞ。」

そう言つて、

ポチと一緒に

フワリの家へと

白い靴をはいた足を

向けるのだった．．。

5 話へ続く．．．

第4話【舞姫】Bパート（後書き）

次回予告

次の日の朝、
フワリの部屋のベッドで
目が覚めたポチは、
そこで太陽の光で
青く光る銀の髪の少女と
出会う・・・そして、
その少女との出会いは…
ポチの新たな旅立ちの
始まりだった・・・。

次回、第5話
↓ 学校への道

ポチ、新たな人格と
おつかいに行く。

第5話「学校までの道」Aパート

ここは、どこだろう…

月明かりの中、

巫^{みこ}が着るような

赤^{そで}い袖のある

白い衣装を上に着て、

裾^{すそ}が大きい

赤^{はかま}い袴を

下にはいた

長い黒髪の少女が一人、
立っていた。

その少女、

鈴鹿御前は、

「そろそろ…そなたらも
ポチ殿^{どの}の前に
姿を見せたらどうじゃ」

そこにいる少女と少年に
話すと・・・少女の方が

????

「分かったわよ。

まず、

あたしから、出るわ。」

そう言うので、鈴鹿は、
右手の4本の指先を

口元にそえて、
プツ…クク…と
笑いながら

影になっっている
その謎の少女に

鈴鹿御前

「そなたか…ププツ…
そなたは、確かに
わかりやすい性格を
しとるから…
ポチ殿も扱い
やすかるう…。」

そう話すと、
その影の少女は、

???

「うつさい!!」

…と、

声をあげるのだった。

次の日

フワリの部屋の中で…
ポチは、

自分の身体の上に大きな
タオルだけ、かぶって、
横向きに寝ていた・・・。

フワリは、ベッドの上で
寝ていいよ。…と、
言ってくれたのだが・・・

まだ子供のフワリを、
床^{ゆか}の方へ
寝せるのは、大人の
コボルトとして、
許せるものでは、なかった…

だから、かぶっていた
大きなタオルをとった
ポチは、立ち上がって、
大きなタオルを
畳^{たた}むと・・・
その部屋を出て、

そのあと・・・
台所のある居間の方へ
歩いていった

そして、
居間の外のところまで
立ち止まる、
ポチの犬のような耳に

???

「いい？フワリ。

ここの味付けは、

魔法のように

自分の感覚を

研ぎ澄ませるの…」

???

「そうそう・・・

まっ、あんたは、

出来る子だから、

心配してないけど・・・

がんばりなさい。」

???

「うんうん。

あんたは、素直すなおで良い子よね。」

居間の中から、

声が聞こえてくる・・・。

声の主が何者なのか

確認するために

居間の中に入ると

太陽の光で青く

かがや輝く銀の

ちやうほう長髪の、

頭の左側を青いリボンで

結^{むす}んで・・・

頭の左側^{ひだりがわ}の銀髪を

テールの形にした…

むらさきいろ
紫色^{むらさきいろ}の

瞳^{ひとみ}の少女が

台所の前に立っ^{なべ}ていて…

鍋^{なべ}の底^{そこ}に火をつけて、

何かを煮^にていた。

その少女は、右横の方に
顔を向けて、

ポチの姿を

確認すると・・・

「目が覚めたみたいね…
待ってなさい。

今、作った料理を
持っていくから…。」

そう言っ^てて、

また鍋の方を見て、

左手に持った、

おタマのようなもので、

鍋の中を、

かきまぜていたようなので…

ポチが

「キミは？」

白いワンピースを着た、
その少女にたずねると

「??？」

「ゴメン。」

自己紹介が、
まだだったわね・・・。

あたしは、

フワリの前世の一人で

オリエンス＝シルフィード っていうの。

当然、この姿は、鈴鹿と

同じで、光で作った

まほうし
幻よ。」

その少女が、

凛とした声で、

そこまでいうと・・・

今度は、違う、

ほがらかな表情と声で、

ポチの方に顔を向けて…

「シルフィちゃんは、

照れやさんで、人前には、あまり姿は、ださ…」…

その言葉の

途中で

柔らかかった

表情が元のキリツとした

顔になり

シルフィ

「もういい。もういい。
みなまでいうな。」

…そう言ったかと思えば

またフワリの表情になって

「それで、シルフィちゃんは、風の精霊のモデルに、なった人んう」

そこまで言うと、また…

猫ねこのような目を

したシルフィの表情に

変わり

「はいはい。

それは、あとであたしが
話すから…」

そんな様々《さまざま》なやりとりをし

ているので

ポチの

「仲良いんだな。」

…
ひとつ…という言葉

シルフィが、

また鍋の方へ視線を戻し

「そんなに良くは、
ないわよ。」と、言えば

フワリが

「それはないよあ。
シルフィちゃん。」

そう言葉を返し

ポチは

（素直^{すなお}じゃ…

ない・・・か・・・）

でも、息ぴったりだ…と

また左手のおタマで

鍋の中の料理を

かきまわす

シルフィの姿を見ながら
思うのだった・・・。

・・・

それから、

テーブルの上で

シルフィが、

少し底^{そこ}の

深い皿に盛^もった…

ボルシチという料理を
食べたポチは・・・

正座^{せいざ}するポチと

テーブルをはさんで

向かい側^{がわ}で、

あぐらをかいてる

シルフィに、

「そついえばさ・・・」

と、

話を、

きりだそうとした時…

シルフィから

「わかつてるわ。

器^{うつわ}に

魂^いを入れるところが

見たいんですよ。

その前に、まず使った

食器^{しょっき}を

かたづけましょ。」

ポチの言おうとしていた
事を、先に口にしたので

ポチは

「あ…いや…ああ・・・」

まずは、

両手に持った皿に
シルフィが使った
スプーンを

乗せたりして…

シルフィの言う通りに
テーブルの上にあった
食器を全部かたづけると

「じゃあ、

フワリの部屋に行くわよ」

そうシルフィに

言われたので

ポチは、

「あ・・・ああ・・・」

…と、居間を出て、
シルフィのあとをついて
いった

フワリの白い部屋

白一色の部屋の中に入った、

シルフィは、部屋の

隅の方まで

行って・・・

部屋の中に、

続けて入ったポチに、

シルフィ

「テーブルに座ってて…」
そう言って

それに対してポチが

「あ…いや…そうだな」

…そう言ってるあいだに

シルフィは両手で、

そつと・・・

大きな木箱きばこの

フタを開あけて、

フタを、置いたあと…

木箱の中から、

背中に蝶はのような

二枚にまいの

白い羽ははねづのついた

背中にとどくぐらい長い

紅い髪かみの35センチくらい

の身長しんちょうの女の子の

人形にんぎょうを、

両手で、取り出すと

それを、

正座しているポチがいる

小さなテーブルの方に

持もっていつて・・・

テーブルの前で、

あぐらをかきながら…

テーブルの上に、その
緑のドレスのような

ものを着た、

ようせいがた
妖精型

のホームンクルスの器を、
置いて・・・ポチに、

シルフィ

「じゃあ、

声を出さないで・・・
見ててね。」

そう言つて…

テーブルの

向かいで正座するポチが
首を一度、縦にたて
振るのを確認すると

シルフィ

「じゃあ、始めるわよ」

目を閉じて

精神を集中させる・・・

すると、シルフィの

身体のまわりに

太陽のせいで、色が

うすくなっているものの

鈴鹿のまわりに

浮かんでいた、

1000にも近い数の、
あの青白い小さな光が
現れて、

シルフィが、

手の平を広げた左手を
上の方に伸ばすと

そのかざした

左の手の平に

青白い魂の光が一つ、

吸い込まれていく

すると、

その左の手の平が、

突然

青白く光り始め

あぐらをかいだ

シルフィは、

自分の前のテーブルに

仰向けに置いた

あの小さな器の上に

自分の輝く左手をかざす

すると・・・

シルフィの左の手の平が
光を失い・・
うしな

変わりに出てきた

あの小さな青白い光が・・

仰向けに置かれた器の

胸のところに

吸い込まれていく・・

それから、

いつぐらいだろうか・・

あの仰向けに倒れていた

小さな妖精の、

右手の指の何本かが・・

ピクン・・ピクン・・と、

動きだしたのは・・

やがて・・その妖精は、

起き上がって、

テーブルの上に立つと・・

シルフィの方を見上げて

???

「あう・・えう・・あうあ・・」

言葉にならない言葉で

話しかけてきたので・・

それを見たポチが、

「言葉は、

まだ話せないのか？」

その事をたずねると、
シルフィは、

「魂^{たましい}は、

脳^{のう}じゃないから

記憶^{きおく}が

あるわけじゃないわ…

だから、

どんな魂であろうと…

器^いに入れた時は、

みんな、赤ん坊と

同じなのよ…。」

そう…ポチに言ったあとで
生まれたての妖精の
顔の前で…

シルフィ

「眠りなさい。」

スーッと、

左手の人差し指の指先を
左、上、右、下、左…と

そんな円を

何回^{なんかい}も

描^{えが}いて、

テーブルの上に立つ

妖精を眠らせて…

テーブルの上に仰向けに
倒れさせると・・・

その白い蝶の羽をした
妖精を・・・

両手の手の平で、
そ〜っと・・・
すくい取ってから、
立ち上がり、

それから部屋の
隅の方まで行ってから…

両手の手の平で、
すくいとった妖精を

蓋^{フタ}の
空^あいた木箱の
底^{そこ}の方に入れると、

それから・・・
木箱が置いてあったところの、
すぐ近くにあった…
工具^{こうぐ}の

ドライバーを左手に持って…

その左手にもった
ドライバーで、

妖精^{はい}の入った

木箱の
すぐ側^{そば}に

置いてあつた木箱のフタを…

ブスブス…と、

何回か突き刺^さして

木箱^{フタ}の蓋に

何^{なん}か所^{しょ}か…

穴^{あな}をあけてから

立ち上^あがって、

そのドライバーを

元^{もと}にあつた場所に

戻^{もど}し…

それから、

部屋^{すみ}の隅^{すみ}の

方である

その場所の

近くに置いていた…

何か所か穴をあけた

その木箱のフタを使って

木箱のフタを閉じると…

シルフィは、

それを両手に

挟むように、
抱えて、

立ち上がり、ポチに

シルフィ

「じゃあ、これから
これを、持って行くから
良かったら、
ついて来る？」

そう聞いてくるので
ポチは一回、
首を縦に振ってから

ポチ

「ああ・・・行くけど・・・
いったい・・・どこに、
行くんだ？」

そう言つて、
立ち上がると・・・

シルフィは、
少し考えた表情で
上を向いて・・・

それから、
少し考えこんだあとで

ポチの方を見て

シルフィ

「そうねえ」

簡単に言えば、

ペットシヨップみたいに、この魂が^{はい}入った

生きている器を

管理してくれる

ところかな？

ペットに例^{たと}えて

言えば、あたし達は、

そのブリーダー

みたいなものだから…」

そう話して…

そのあとポチに、さらに

シルフィ

「じゃあ、あたし

箱を抱えてるから、

先に行って、

ドアとか開けてもらって

良いかな？」

そう頼^{たの}んで、

ポチが

「分かった。

先に歩いて、この部屋や
玄関のドアの

開^あけ閉^しめを
オレがやれば
良いんだな？」

そう言^いうと、

木箱を両手に持^もつた
シルフィは、
立^たったままで

「ありがと^う。玄関^{げん}の鍵^{かぎ}は、
その左側^{さみぎ}の方^{かた}の
衣紋^{えもん}掛^かけに
かか^かつてい^いる、

黄緑^{きよろ}の服^{ふく}の
ポケツトの中^{うち}にあるから
玄関^{げん}を出^でる時^{とき}に
頼^{たの}むわね・・・。
あ^あとは、あ^あたし^が
先^{せん}行^{こう}す^る
から、あ^あなたは、
あ^あとから、つ^ついて来^きて」

そう言^いつて、
それ^{それ}に對^{たい}してポチ^が

「分^わかつた。」

…と返^へ事^じをして、

言われた通りのところへ
行つて・・・

黄緑の服のポケットから

キーホルダーのついた

玄関の鍵を

右手で取り出すと、

シルフィ

「じゃあ、行きましょ。」
そう言つて、

木箱を両手で持つて

歩こうとする、

シルフィの前を

ポチが

先行して…

歩くのだつた・・・。

【Bパートへ続く…】

第5話「学校までの道」Aパート（後書き）

太陽が照らす歩道の上を
白いジャージを着たまま
歩くポチが

白いワンピースのような
ものを来て

銀髪の頭の左側を

青いリボンで

結んだ少女

シルフィと

一緒に

歩いていた・・・。

ポチは・・・

40センチ四方の

木箱を両手に

抱えて、

先を歩く、シルフィに、

ポチ

「ところでさ。

シルフィも大和姫も

ジパングの言葉を

話せるって事は、

ときどき、こうして、

姿を変えたりして、

ジパングの言葉の

勉強をしてるのか？」

…そう言うとシルフィは
顔を一回、
横に振^ふって

シルフィ

「そうじゃないわ。

あたし達は、一つの頭に
いくつもの意識が
共有^{きょうゆうめい}

してるようなものだから
フワリが

ジパングの言葉を

覚えれば、

自然と私達も

その言葉を覚えるのよ」

つまりは、フワリの
能力^{のうりゆうへき}

『《イコール》自分達の
実力なのだ』と話すので

いつの間にかシルフィの
右隣を歩いていた
ポチが

「じ…じゃあ

エッチな本とかも…」
そう言う

シルフィは、顔をポチの
いる方へ向けて

「なあ、

言いたい事は、分かるが、とりあえず

変な想像は

止めないか？」

箱を持って歩きながらも

猫のような目で、

じいゝと

ポチを見るのだった。

f i n

第5話「学校までの道」 Bパート

太陽が照らす歩道の上を
白いジャージを
着たまま歩く、
コボルトのポチが、

白いワンピースのような
ものを来て

銀髪の頭の左側を

青いリボンで

結んだ少女

シルフィと一緒に

歩いていた・・・。

ポチは・・・

40センチ四方の

木箱を両手に

抱えて、

先を歩く、シルフィに

ポチ

「なあ、髪を

両側で

結んだものを

ツインテールって、

言うんだよな・・・。」

ポチが、そう言うので、

シルフィが、
「そうだけど…それが
どうかしたの？」

その事を
たず尋ねると、

ポチが

「いや・・・

シルフィみたいに
かたがわ片側だけ

髪を結ぶのは、
むす

なんて

言うんだろうな・・・と
思っで…」

そう言うので、

シルフィは、

木箱を両手に持って、

歩きながら・・・

顔をあげて

「うん。

なんて言うのかなあ？
ワンテール??」

…と、言うところ
そこにポチが、

「テールは、
尻尾しつぽっていう
意味だろ。」

そう言ってくるので、

歩きながらシルフィが、

「そのようね・・・。」

…という返事をする、

ポチが

「じゃあ、シルフィは、
左側をテールに
してるから・・・

ここは、男らしく

左しっぽと名づけよう」

勝手に、
かって

そんな提案ていあんをするので…

両手に木箱を抱えて歩く
シルフィは、

一度、立ち止まって、

「おい・・・。」

・・・無表情な顔で、

うしろで歩いている
ポチの方を見るのだった

道路の
ほどうがわ
歩道側で

180センチくらいある
白いジャージを着た
コボルトである
ポチの前を・・・

青く光る銀髪
の頭の左側を青いリボンで
むす
結んで

テールの形にした
90センチくらいの少女が

木で出来た箱の下を両手で支えながら
青い靴で歩いていた

しかし、もう、これで
なんがいめ
何回目

だろうか・・・
ポチが、
その少女シルフィに、

ポチ

「なあ、持とうか…」

…と、

声をかけたのは…

半分近くある、

その木箱を

挟はさむようにして

抱えていた時とは、違い

今は、箱の下を両手で

支えているので、だいぶ

無理があるのだ…。

ポチ

「第一、だいいち

その持ち方かただと

前が見えないだろう。」

ポチが何度そう言っても

シルフィ

「大丈夫よ…。

気配けはいで、

人や自転車が来た時は、

分かるから…

まわりに迷惑は、

かけないわ。」

…シルフィがそう言って

聞かないので

もう、ポチは、頭の中で

（でも、もう、だいぶ、
息があがっているぞ…）

今、見ている

シルフィの姿が
幻^{まぼろし}とはいえ

ポチから見れば、
大きな箱を持って
歩いてる小さな
女の子なので

思わずポチは、

「目的地つてあと、
どれくらいなんだ？」

・・・と聞かずには、
いられなかった。

すると、シルフィから…

「もう、そろそろ、
見えても良いはずよ。
ヘルメス学院ヒノモト校が…」

…と、告げられて、

さらに先に進むと…

やがて…ポチの目に
白黒ながら

ヘルメス学院が
見え始めた…

ヘルメス学院

そこは…
とても広い場所だった…

学院の門から入った
ポチが

「遊園地より
広いんじゃないか？」

…と言ってしまふほどに

そんなポチの言葉に…
木箱を持ちながらも、
先を歩く…シルフィは、

「当たり前よ。

ここには、

生徒に対しての
ねんれいせいげん
年齢制限がないから…

子供の生徒だけじゃなく
大人の生徒もたくさんいる…
それに、あなたみたいな

ヒューマン《人間の事》
じゃない人も少数ながら
いるみたいよ。」

そう話すので

それを聞いたポチが

「そうなのか？」

・・・と、

言いながらも頭の中で…

ポチ

（オレみたいに悪魔に

呪いをかけられた

人間が、他にも^{ほか}

いるって事か？

いや・・・もともと、

そういう人間もいたって

うわさもあるしな…）

そんな事を

考えているうちに・・・

いつの間にか

立ち止まっていたらしく

箱を持って

先を歩いていた

シルフィが顔を

ポチの方に

向けようとしながら

「こらこら、そこ！
立ち止まってないで
さっさと行く！」

そう言うのと、

それを見ていたポチから

ポチ

「おい…足元…」

そう言われても
きづ
気付いた時には
おそ
すでに遅く…

木箱の下を両手で
ささ
支えながら
歩いてきたシルフィは、

地面に埋^うまっていた石に…

右足に履^はいていた
方の青い靴のつま先が、
ぶつかって、

「きゃあつ。」

スッテーン！と前の方に

転ころんでしまった

そのせいで、中に
妖精ようせい型がた

のホームクルスが
入はいっていた

40センチくらいの木箱は
さらに前ほうの方に
投げ出され・・・

シルフィは、

前りようの方に
両腕うでを
伸のばした・・・

マンガ
漫画みんがみたいな
見事みごとな
瘦こけかたで

うつ伏ぶせて
倒たおれてしまった

ポチは

「大丈夫か！」

・と、うつ伏せに倒れたシルフィに
駆け寄よろうとするが…
その途とち中で

シルフィ

「来こないで！」

…顔を上げたシルフィに
言われて、ポチが
立ち止まると・・・

シルフィ

「一人で、立てるから」

・・・そう言われたので
ポチは、シルフィが
立ち上がるあいだに…

ポチ

「分かった・・・。」

…投げ出されたせいで、
中から飛び出した妖精を

蓋^{フタ}の取れた
木箱の中に入れたあと

はず
外れていた
蓋^{フタ}を、

また木箱の上に
被^{かぶ}せてから…

また、その木箱を両手で
持つと・・・

衝撃^{しょうげき}を

与^{あた}えた時に…

目を覚^さました妖精が暴^{あは}れた事で、

箱の中からドンドン！と

軽い衝撃と音がするので

ポチは、

「これは…

急^{いそ}いだ方が、

良いな・・・。

オレが持つていくから、

シルフィが、先行して

みちあんない
道案内

をしてくれ・・・。」

立ち上がった、

シルフィに向かって、

そう言う・・・

シルフィは、ポチに、

顔を見られないように…

さっさとポチの前を

歩きながら・・・

シルフィ

「ゴメン・・・

そうしてくれる？」

…普段ふだん々と違って、消えいりそんな声で
そう答えるので・・・

気になったポチは、
歩く速度を上げて…

「どうした？」

木箱を両手に
抱えたまま、

チラッと、

シルフィの横顔を
見みると・・・

ポチ

「泣いてんのか？お前」

涙を紫色の両目に、
溜めたシルフィの
横顔が見えたので、
そう言う・・・

シルフィは、左腕で
両目をゴシゴシ
擦りながら…

シルフィ

「泣いてなんかいいわ。
これは・・・そう・・・
汗よ！」

そう言うって、

トテトテ…と

逃にげるように…

歩く速度をあげて、

またポチの前を歩くので

ポチは、そのまま、

シルフィのうしろを

箱を持って、歩きながら

ポチ

「なんで？そこまで

意いじ地に

なるんだ？」

・・・と、

聞いてみると、

シルフィ

「だってさ・・・

こんな荷物にもつ一つ運はこべないような

女が、風の精霊の

元になつたって、

知ったら、みんな

ガツカリするじゃない？

だから・・・

精霊信仰せいれいしんこうとか、してる人達に

申し訳もうなくて」

そのあと、

両肩を少しだけ

震ふるわせながら

シルフィ

「ああ！もおー！

なんで、こう

不器用^{ぶきよう}

なんたる！

あたしは・・・」

そう叫^{さけ}んで

一人で葛藤^{かつとう}

していたので・・・

歩きながら、その背中を
見ていたポチは、

「まあ、どんな人間だって、理想通りには、なかなかいかないもの
さ・・・。

だからさ・・・

急^{いそ}がないで、

着実^{ちやくじつ}に

一歩ずつさ・・・

理想^むに向かって

歩^{あゆ}んで

いこうな・・・」

すると、シルフィは、

また、両方の肩を

震わせながらも・・・

今度は、プツ…ククツと
笑って・・・

シルフィ

「ぷはははは・・・

あんたも良く笑わないで、そんな恥^はずかしいセリフがいえるわね！」

シルフィが、

うつ向きながら、笑っているのが、
背中から見えるので

ムツとしたポチは、

両手に木箱を
もちながらも

「し…仕方ないだろ！

言ってるオレも、

死ぬほど恥^はずかしかった
んだよ！」

シルフィの後方を

歩きながら、

恥^はずかしそうに

そう言っと・・・

シルフィが

「あなたも、良くあたしに構^{かま}うわよね…。
何^{なん}で？」

その理由を聞いてくるので…

先を歩くシルフィの
背中を見ながらポチは、

「あ．．いや．．何だ、その．．．つまりだ。
シルフィのその考え方が
嫌いじゃないからさ．．」

照れくさそうに、
そう話すと、

それを聞いたシルフィが

「素直に好きって言え」

前を歩きながらボソッと
そう呟いたの
だが．．

ポチには、良く聞こえず

ポチが

「へっ？」

何か言ったか？」

そう聞いても、
シルフィは、一度

「な！なんでもないわ！そ．．．空耳そらみみ
そう空耳よ。きっと！」

そう言つて・・・

それを聞いたポチも

「そうなのか？」

そう答えて、

その話は、
はなし

一度、終わったのだが…

少しすると・・・

歩きながらも、

そおつ…と、ポチのいる
うしろ後ろを見た

シルフィが

「ねえ…聞こえた？」

また、そう言つてきたので…

ポチが、

少し揺れる
ゆ

木箱を両手で
かか抱えながら…

「なあ、ホントに

なんか言わなかったか？」

そう聞いては、

みたものの、シルフィは

「え…えつと…あの
その…そう！風の音。
きつと！風の音よ！！」

プイツと前を向いて
歩きながら・・・
そう答えるので、

ポチは、
「そ…そうか！」
気のせいか・・・と、

シルフィと話を
していた時に
おそ遅くなった
歩行速度を、また、
はや速めるのだった

．．．
それから、
ちくてき目的の場所に向かっ
て、
少し歩いていると・・・

ポチの前を歩いていた
シルフィが

「はあ…良かったあ。
今日は、生徒達に
会わずにすんだわ…。」

急に、^{きゆう}

そんな事を言ったので、
ポチは、

「生徒達と何か

あったのか？」…と、

聞いてみると、

シルフィは、

「何かあったって訳
じゃないけど・・・」

そう言うと、そのあとで
両肩を震わせながら

「だって、あの子達、
あたしの事を・・・
勝手に

ミヤアちゃんとか、

タマちゃんとか

名付^{なづ}けたりして

猫扱^{ねこあつか}い

するのよ・・・。

拳^あげ句^くの

はてに、

あたしの喉^{のど}を

指先でコロコロ

撫^なでたりして…

ホント、失礼^{しつれい}しちゃうわ。
」

そう話すので、

ポチは、
バウツ…と、
吹きだしてしまい

シルフィ

「笑うなよ。もぉー！」

一瞬^{いつしゅん}

うしろの方を見て
そのあと、フン！…と、
前へ視線^{しせん}を
戻^{もど}して、
歩く速度を速める
シルフィに・・・

ポチ

「ゴメンゴメン・・・」

…と、
謝^{あやま}りながらも
頭の中では・・・

（ちっちゃいし・・・
ホント猫っぽいから、
つい…からかいたく
なるんだろうな・・・）
…と、

そんな事を考えながら、
シルフィのあとを
追^おうのだった

そして、それから、
さらに少し歩いて…

心霊科学研究所
もくてきち

目的地に

辿りついた

ポチは

「ここか・・・」

両手に木箱を抱えながら

その外見が、

少し黒っぽい鉄の色をした…

半球形の大きな建物を
見上げていた・・・。

入口の側には、

白いワンピースを着た

シルフィが立っている…

そして、ポチが、研究所の入口である

その白いドアの前に立つと…

シルフィが、

「箱は、もう揺れ

なくなった？」

そう聞いてきたので

ポチ

「ああ・・・少し前から
おとなしくなった…」

…と、

ポチが言うつと…

シルフィは、

クルリと、

ポチに背中を向けて、

「ほ…ほほほんと、
いろいろ助けてくれて、
その…なんだろ…」

^{りようかた}
両肩を

^{ふる}
震わせながら、

何かを話そうとしてるのでポチが、

「いや…」

何を言おうとしてるのか
分かったから…」

無理をするな…と、
言おうとした時

シルフィ

「つまり！

感謝してるって
言う事よ！！」

ひらき直^{なお}った
ように…

シルフィが話すので、
両手に木箱を抱えながら
ポチが

「いや・・・」

オレも、シルフィや、
フワリに

世話になつてゐるから

あたり前の事をしただけ
だつて・・・」

こつちこそ、いつも

ありがとうな・・・と、
シルフィのうしろ姿を
見ながら話すと、

その前でシルフィは、

恥ずかしそうに頬ほおを薄うすい紅べにいろ色そに染そめながら・・・

「素直たうちうに返すなよ。
対応たいおうに

こまるじゃないか・・・」

そう言つと、フツ・・・と、
フワリの姿に変わり

フワリは、桜色がうすく
かかった白い髪を
フツと、揺ゆらし
ながら・・・

振り向ふいてポチを
見上げると・・・

「シルフィちゃん・・・

ポチに感謝かんしゃ

されて・・・

とっても、恥ずかしかったみたい・・・

それでね。ポチ・・・」

次の瞬間しゅんかん

ポチは、

思わず息を飲んだ

フワリ

「まつ、ありがとね・・・

だって・・・」

なぜなら・・・そう言う

フワリの姿に、

優しくやさ

微笑むほほえ

シルフィの

面影がおもかけ

重なったからかさ

だった・・・。

6 話へ続く・・・

第5話「学校までの道」 Bパート（後書き）

次回予告

心霊科学研究所

その入口である

ドアの前で、

木箱を持って立っていた

白いジャージを

着たポチは

その側で、
そば

ポチを見上げる

白いワンピースの

ようなものを着た

フワリに

ポチ

「なあ、シルフィって…

たまに、背中を向けて

話すけど・・・

どうしてなんだ？」

その事について聞くと…

頭のうしろの方に、
蝶結びつむぎむすびに

した

青く大きなリボンをつけたフワリが、

「シルフィちゃんって…
照れると、そつぽを向く
クセがあるの。」

…と、

そう話すので、ポチが、

「そうなのか？」

…と、

もう一度、聞くと、

フワリは、

「うん。そうだよ。」

・・・そう答えたので、

ポチ

「ここで、フワリに
変わったのも…

恥ずかしかった事が
理由なのか？」

…と、

聞いてみると、フワリは
自分の顎あごに

左手の人差し指の指先を
そえて・・・

「うーんと・・・

違うみたい…ここに
苦手な人がいる

みたいなの・・・。」

そう言うので、

ポチは、

「苦手な人・・・」

そう…つぶやきながら、
頭の中で

（すべての答えは、
このドアの中か・・・）

このドアの向こうにいる
シルフィが苦手な人物と
いうものに思いを
めぐらせるのだった…。

はたして、シルフィが
苦手な人物とは・・・

次回、第6話

【サイレントキル】

お楽しみに・・・

第6話「サイレントキル」プロローグ

海の星アクアマリン・・

この星でも中部にある
地域では、
紛争があつた…。

中近西、戦場へ
多くの家が炎に包まれた
夜の戦場に…

緑色のガスマスクを
頭部につけて…
緑のボディスーツで
全身に身を包んだ男¹が、
右手に銃を持って、
立っていた…。

その足元には、
黒い衣服を着た
髪の長い女性が、
血の海にうつぶせて
倒れている…。

その緑色のボディスーツを着た男¹の
七メートルほど
離れたところに…

ザッ・・・

黒いプロテクターのようなボディスーツを着た
少し髪の長い青年Aが
現れた^{あらわ}…。

そして・・・
現れた^{とたん}途端…

青年Aは、
右手でナイフを
握^{にぎ}ったまま、

緑のガスマスクをつけた
男1の方に向かって走り

そこで走ってくる、
青年Aの存在に気づいた

緑のボディスーツを着た
男1が右手に持った
黒い銃を

青年Aに
向けようとした時！

青年A
「遅い^{おそ}…」

青年Aは、右手に持った
ナイフの刃をブスリと…

緑のボディースーツを着た
男1の心臓に突き刺し…

男1は、右手に握った
銃の引き金^{がね}を
引く事なく
ぜっめい
絶命し…

青年Aが男1の左胸から
右手に握ったナイフを
引き抜くと…

男1は、
右手に銃を握ったまま
その場に、

くずれ落ちるようにして
うつぶせに倒れた…

青年A
(これで一人…)

だが青年Aは、すでに
気づいていた…。

敵の数が、
これだけでは、ない事に

青年A
(みきがわ
右側か…)

距離^{きょり}は、

およそ十メートル前後)

おそらく、敵は、青年Aの存在に気づいて…

銃の引き金を引くところ
だろう・・・

それから、青年Aは、

男1の身体から

引き抜^ぬいたナイフを右手に

その敵のいる場所へ

向^かかって駆け出し

やがて・・・

男1と同じガスマスクと

ボディースーツをつけた

その敵の男2が

両手に構えた銃で

自分の頭部を狙って

いる事に気づく・・・

それを見て、

(しめた!)と、

思った青年Aは、

敵の男2が銃の引き金を
引く1秒手前で…サッと
頭だけを下げると・・・

パン！！と銃声が
聞こえた時に
自分の後頭部から
後ろの首筋にかけて
熱が伝わるのを感じる…

それは、おそらく、
頭部を狙って
放たれた
弾丸が…
そのすぐ上を
通過したから
だろう・・・。

その事に男2が
気づいた時には…
その男2の視界にすでに
青年Aの姿は無く…

次の瞬間
その男の首筋に・・・
男2の背後にまわった、

青年Aの
右手に持った
ナイフの刃が当てられ…
そして…

シュパッ！・・・

痛みを感じる

暇もなく男2の首に
一筋の

赤い線が走る・・・。

それから、青年Aは・・・

仰向けに

倒れようとする男2を

盾にして、

身を隠し・・・

パン！…という

銃声と共に別の方向から飛んてくる

弾丸を男2の身体を

使って防ぎ…

銃声が聞こえた方へ

男2の死体ごと身体を
向けると…

青年

（距離は、十メートル
ちよつとか・・・）

銃を発砲した

敵の男3との距離を

9メートル…8メートルと
詰めていき・・・

7メートル付近でパンと　もう一度、身を隠している
死体の身体で銃の弾丸を
受けたあと…

青年 A

（この距離なら…）

青年 A は、パツと、

身を隠していた死体から
離れると…

ガスマスクをした、
敵の男3の身体めがけて
右手のナイフを、
ビュンと投げつけた！

すると…

そのナイフが刺さった
男3の左胸から、
ブシュウウーと、
赤い血が吹き出し…
緑色のボディスーツを

着た男3は、
その場でドサツと
仰向けに倒れた。

青年 A

（これで…終わったか…）

そう思った時、青年 A は、背中に人の気配を感じた

青年A

（十メートルくらい先か
ナイフを取りに行く
時間を考えると・・・
さすがにヤバいな…）

絶対絶命だと思った、
その時・・・

パン！！

銃声が聞こえて、先ほど

青年Aが感じた
けはい
気配が消える

青年A

（敵か？それとも・・・）

青年Aがナイフを取りに
戻ろうとしているうちに

銃声が聞こえたところの
奥の方から聞こえる
足音がザッ、ザッ…と
大きくなり

？？？

「さすがのお前も
今のは、ちよつと
あぶなかったようだな」

黒髪の青年Aと同じような黒いボディースーツを着た
銀髪の青年Bが
近づいてくる・・・。

青年Aは、その青い目で
肩までとどくくらい長い
銀髪をした青年Bを見て

青年A

「スレイブか…髪切れ。
お前・・・」

そう言うところ…

腰こしの右側に

拳銃を差した

長い銀髪の青年Bは、

「あぶないところを
助けてもらって、
いきなり、それかよ…」

そう言うところ…

ハアッ…と、

ため息を吐はいて…

そのあと、

青年Aが倒してきた
三人の男の死体を

見渡すと…
みわた

青年 B

「しかし、こいつら…
魔女狩りを
まじよが

してる奴らだよな・・・

そのわりには、

銃を撃つ時とか…

素人くさく

なかったか？」

青年 B がそう言うところ…

青年 A

「魔女狩りだからだろ」

…と、青年 A が言うので

青年 B

「どついう事だ？」

…と、青年 B が

青年 A に聞いてみると

青年 A は、

「こいつら、ガスマスクのようなものをつけているけど…

おそらく、その中には、

魔法使いを発見するための装置みたいなものが、

ついているんだろう…

それに・・・」

そう言つて、そのあと

青年Bが

「それに？」

…と、青年Aが言つた事を繰^くり返すと・・・

青年A

「素人^{しろうと}を

なめない方がいい・・・

最近の素人の中には、

戦闘^{かん}に関する

知識がオレやお前を上回る奴もいるし・・・

何より殺す時に

躊躇^{ちゅうちゆ}がない・・・オレもお前も

油断をすれば

殺^やられるぞ…。」

青年Aがそう言つと…

青年Bは、広げた両手を

肩のところまで

上げながら

「戦争のプロのオレ達を
上^{うわまわ}回る

素人がたくさんいるって

事か…

おお、ヤダヤダ。」

そう言つと…青年Aは、
青く輝く^{かがや}月を
見上げながら…

青年A

「まあ、

そういう時代だから
彼女らは、ふたたび
現れたのだろう…。」

そう話す…青年Aを・

青年Bは、

「ミューズか…
単なる伝説だと
思っていたのに、まさか
実在したとはな…。」

そう言つて、

その青い目で

青年Aを見つめる…。

その視線の先で、

月の光に照らされながら
月を見上げる青年

スコール「クールアイの

姿は、どこまでも幻想的な美しさを放っていた…。

第6話「サイレントキル」プロローグ（後書き）

亜人種について…

ポチのようなコボルトも
この亜人種に族するが…
亜人種が生まれる理由は
大きく二つに分けられる

自然発生種

このアクアマリンの
世界は、魔法などが
生まれている事からも
分かる通り…
意思が世界に及ぼす
影響が私達の世界よりも
極めて高い…

それゆえ…
人の飼い犬などが
人の姿を見て…
人のようになりたいと
思い続けた場合。

その飼い犬自信は、
無理だが
2代3代と続いていく…
その犬の子孫達の
脳などに、その考えが

影響を与え、

やがて、それが身体にも
影響を与えて

人の姿に近づいていく
…という説がある…。

この進化の早さは、
この星だからこそ
考えられる事だろう…。

突然変異種

これは、ポチみたいに
魔法で姿を変えられた
ものと…。

人によって作られた
人工のものと
二つに別れている…。

なお、ポチみたいに
魔法で姿を変えられた
亜人種と違って、

人工の亜人種は、
人間達に逆らえない
ように、脳に
刷り込みをされて
いるので…。
人に対しては、

どこまでも従順である...

第6話「サイレントキル」Aパート

「心霊科学研究所内部」

そこは、

コンピューターや

魔法の研究をするための

設備がたくさんあり…

今は、10人くらいの人が

自分達に割り当てられた

場所に立ったり、

座ったりしている…。

そこに白いジャージを

着た…コボルトである、

ポチと

ポチの半分くらいの

身長で…

白いワンピースを着た、

フワリが

^{はい}入ってきた…。

両手に、妖精の入った

木箱を持ったポチは、

となりに立っている

フワリに・・・

ポチ

「なあ、この中の妖精は
誰に渡せばいいんだ…」

両手に

^{かが}抱えた箱を

見下ろしながら、聞くと

肩くらいまである、

うっすらと桜色がかった^{しろかみ}白髪をした

フワリは、

「ここが一番エライ人」

…と、

ポチに、そう言ったあと

研究員のところに行って

フワリ

「クールアイ所長に

用があつて、

来たんですけど・・・」

所長は、どこですか？と

立ち仕事をしている・・・

その白衣を着た研究員に
聞くと・・・

その研究員は

「所長に何かご用があるんですか？」

…と、

逆に聞いてきたので

フワリ

「シルフィちゃんが来た

…と、所長に言っ

てもらえばわかる

と思うんですけど・・・」

フワリがそう言う・・・

その研究員が

何か思い出した

ような顔で

「ああ！

あなたがシルフィちゃん
ですか！！

所長は、たぶん、この
右側に見えるドアの中に
いると思うので、

行ってみてください。」

そう言うので…フワリは

「ありがとう

ございます。」

…と、

その研究員の前で

ペコリと頭を下げながら

ポチのいるところまで

もどるところだったけど…

その途中で

足を止めて…

姿は、フワリのままだが
キリッとした表情になり

「ちょっと、フワリ…

あんた、また、

あたしの

名前を使っただけ。」

シルフィの

凛と

した声になったと思えば

次の瞬間

「ゴメンね。

でも…あの所長さん…

シルフィちゃんの名前を

出さないで…

中に入れてくれない事があるんだもん。」

フワリのほらかな声に
変わり・・・

それを少し離れたところ
から見ていたポチが

「おい！まわり・・・」
…と、

声をかけなければ
まわりの研究員達に

フワリ
「あっ・・・」

ずっと、注目されたまま
かも、しれなかった…。

それからポチのところに
戻ったフワリは・・・

妖精^{いっしょ}の入った木箱を両手で抱^{かか}えたポチと
一緒に

フワリが研究員に聞いた
研究室のドアを開けて…

その研究室の中に入った

フワリ

「うわー。」

ポチ

「こ・・・これは・・・」

午前中では、あるものの
電気がついてないせいで
ちよつと、

うす暗い研究室の中に
入った、

二人の目に

まず入ったのは・・・

大きな容器の中に

入れられた

薄い赤の

液体の中で

コポコポ...と

膝を

抱えたまま

浮かんでいる

少女の姿だった・・・。

しかし...

その容器の中の

液体の中で浮かぶ

その少女の姿に、

ポチもフワリも
見覚えが
あつた・・・。

ポチ

「この子…シルフィに
似てないか？」

ポチの言葉に、フワリが
ウンウン…と、首を二度
縦に
振って
頷いていると
そこに・・・

???
「誰だ!？」

黒衣に身を
包んだ黒髪の青年が
研究室の奥から、
ポチ達のいる場所へと、
近づいて来る・・・。

そして…少し長い黒髪の
その青年は、
現れた途端に
そのサファイアのような
青い瞳で

フワリの方を見て、

????

「雪うさぎか…

お前に用は無い^な…

だから・・・早く

シルフィたんを出せ。」

そう言うと・・・

フワリは、

ちよっと困った顔で

フワリ

「ごめんなさい・・・

ホントに言いにくいんですけど…

シルフィちゃん、今

出たくないそう

なんです。」

…と、

そう…話すのだが、

そこで、その黒衣の

美しい姿をした

長身の青年が、

「フツ…では

学校行きの話は、

どうなっても良いと?」

そう言うてくるので…

ポチが

（学校行きの話？）

…と、

考えているあいだに

フワリが

「そ…それは、

困こまります！

シルフィちゃん！！」

出てきて！…と

シルフィに呼びかけ、

次の瞬間。

シルフィ

「わかったわよ！

もう！」

その声と一緒に

シルフィの姿に変わると

いつの間にか…

黒衣の美しい青年が、

ネコミミのついた

ヘアバンドを

両手に持って

「これをつけてくれ。」

…と云うので、
シルフィは、
無表情な顔で、

「出てきた途端^{とたん}いきなり、それが…」

そう言つて、
話を進めるのだつた…。

それから…シルフィは、
ポチに

シルフィ

「こいつの名前は、
スコール＝クールアイ。

この研究所の所長にして
もとようへい
元傭兵よ…

こう見えても、かつては
サイレントキルの二つ名を持つ凄腕^{すいづつで}
エージェント
だつたのよ。」

黒衣の青年の説明をして

それを聞いたポチが、

「こんなに綺麗^{きれい}な顔をしてるのに…」

…と、驚いていると

シルフィが

「そうかもね。」

…と、

その言葉を始めに、

「だけど…スコールは、
幼いころ…」

戦争に、ご両親が

巻き込まれたせいで、

小さい時から

ご両親とかがいなかったし…
紛争が

続いていた

その国で育つたと

聞いているから…

どんなに綺麗な姿をしていても…

子供のころは、

それに関わって

生きるしか道が

無かったのよ…。

こう見えても、背中には
たくさんの傷があるのよ

…と、

クールアイが傭兵になった経緯を、
ポチに話して

その事情を

理解したポチが、木箱を

両手に抱えたまま

「だけど…そうなるか…
どうして、

傭兵を辞めて、

ここの所長になったのか
不思議に思えて
くるんだけど…。」

そう話すと…

シルフィが

「うぐ…そ…それは…」

言いにくそうにしている
ところに…。

クールアイ

「それは…オレが
シルフィたんに出会って
しまったからだ…。」

クールアイが、

とっぜん
突然話に

わ
割りこんできて…

クールアイ

「もともとは、

エージェントとして、
当時ある組織から、狙われていた…

雪音フワリを

護衛ごえいする

任務にんむだったのだが…

護衛してるうちにオレは、雪音フワリが…

オレのシルフィたんに

変わる現場を

見てしまったんだ。

そして、それを見た

オレの身体に

電気が走った！！

そして、

気づいたんだ…」

その話を

木箱を抱えながら

聞いていた、ポチが

「何なにに、

気づいたんですか？」

そう…聞いてくるので

クールアイは、胸の前で

ネコミミのついた

ヘアバンドを

右手でギュツと

握にぎりしめながら

「ああ…きつと…オレは

彼女を研究するために
生まれてきたのだと…」

そこまで言っただあと…

シルフィ

「待て…」

途中からの話がおかしく
なっていないか…」

…などと言う、

シルフィの言葉は、
聞いておらず…

さらに…

クールアイ

「そして、それから

オレは、ミューズの
調査

レポートなる、

でつち上げの

申請書をオレの
所属していた組織に

提出し…

それで、それが…見事
上層部の認可をうけて

ここに派遣

された…という訳だ。」

ネコミミのついた

ヘアバンドを近くにある
机つくえに置きながらそう話す…クールアイに

シルフィは、左の方の
眉まゆを

ピク、ピクツ…と、
動かしながら、

「待て。

おかしいだろ…
いろいろと…。」

第一…なんで？それで、
所長になれるのよ…と、
クールアイに聞くと

クールアイ

「それは、キミを
狙そしきった組織を
潰つぶしたから、

そのボーナスってところでいいだろう…。

辞表を出したのに、
いまだに組織から

呼び出しをされるところをみると…。

ここの所長という地位は、オレを辞めやさせないためのものだろうな
…」

そうなった

裏の事情を話し…。

シルフィの

「良くそれで…」

ここの学院の方にも
通ったわね……。」

…と言う話には、

クールアイ

「そこら辺のごまかしは
スレイブあたりに
まか任せた。」

クールアイが、

そう答えるので

シルフィ

「スレイブさん…って…
確か、いつも、あんたの
しりぬぐ尻拭いを
させられてる人だよね」

そう言つて、
かわいそう可哀想に

…とシルフィが、
同情すると…

クールアイも、それに
どうせ同調する

ように…

「ああ…
いつも人の尻拭いを
させられて…大変だな…
あいつも…」

そう言うので…

シルフィは

「いや…主^{おも}な
原因は、たぶん、
あんたですから…」
…と、
そう言わずには、
いらなかった…。

そのあと、
思い出したように、
ポチが

「でも、シルフィのために、
所属していた組織を
辞めようとしたなんて…
凄^{すご}い覚悟
だったんですね…。」

その事について話すと…

クールアイは、
「結局^{けっきょく}

辞めなかったけどな」

…と、そう言つて、
移動しながら・・・

「大した事じゃないさ…
ただオレは、仕事より、
任務にんむより、
世界より・・・
守りたい大切な女が…
できただけだ…。」

そう言つと・・・

シルフィが

「言いたい事は、
わかったが、
人の胸に頭を
押しつけなければ
言えない事なのか？
それは・・・。」

そう言つので、

クールアイ

「なら、

グリグリするぜー!!」

両足の膝ひざを

ついたクールアイが、

頭をグリグリ横に
振りながら…

シルフィの胸に
さらに頭を押しつけると

シルフィは、

「するなああー!!」

…と、

叫び声を

あげるのだった…。

そのあと…クールアイは
立ちあがって…

いったん、シルフィから
離れたもの…

まだまだ、彼の

暴走は止まらず

シルフィの目の前で…

クールアイ

「そして元傭兵のオレは、今までシルフィたんを守るために、いろ
んな事を
してきた…。」

クールアイがふたたび

自分の事について話すと

シルフィが

「組織そしきを

辞めてないんだから…
現役げんえきの

傭兵なんじゃ…」

ないの?…と、話しても

クールアイは

「いいんだ…

なぜならば、その方が、
かつこいいからな…」

そう言ってきかず…

さらに、シルフィが、

「いいのか?それで…」

…と、話しても…

クールアイは、

「そう…

いろんな事をしてきた」
…と、

言うばかりで、

シルフィ

「聞けよ。人の話。」

…などと言う、

シルフィの話など…

まったく聞かずに、

自分の話を進め

クールアイ

「ときどき、

雪うさぎの家から

なが
流れてくる・・・

シルフィたんの声を

聞こえるようにしたり」

シルフィ

「それは、

せけん
世間では、

とうちゅう
盗聴と

いう…。」

クールアイ

「雪うさぎが

シルフィさんの姿に
変わった時は、
傭兵のスキルを
生かして、
こっそり…後^{あと}を
尾行^{びこう}
してみたり・・・」

シルフィ
「それを、世間では、
ストーリーと言う…。」

クールアイ
「彼女の魅力を
広めるために、
生徒達に
シルフィさんと
遊ぶように勧め^{すす}
たりもした…」

シルフィ
「あれの原因は、
お前かぁー!!」

…などと、
話を続けているうちに
シルフィが

「だいたい、なんで、
あたしなのよ！ほかにも
フワリとか鈴鹿とかが
いるじゃない・・・」

そう話すと・・・

クールアイは、

「いや…キミじゃなきゃ
だめ駄目なんだ…」

そう言ったあと、
さらに

「雪うさぎや天女の子は
心の光が強すぎて、
まぶ眩しすぎる…。

だから、オレには、
ミューズという
存在なのに、
どこか弱さを抱えた
キミのほう方に
惹かれるんだと思う。」

そう話すと・・・

シルフィは、

「そうか…

あんたの気持ちは、
良くわかった・・・」

そう言ったあとで…

両膝^{ひざ}を

ついたクールアイに

シルフィ

「けど、子供の胸に、

また頭を、うずめる必要がどこにある…」

…と、話すと

クールアイ

「気持ち良くないか？」

…と、

クールアイが言うので

シルフィ

「気持ち悪いわー!」

シルフィが

自分の気持ちを正直に
伝えると・・・

クールアイ

「こうなったら、頭を
ドリルのように
回転させてやる!!」

両足の膝ひざを

地につけた、

クールアイが

また頭を何度なんども横に振りふながら、

シルフィの胸に、

グリグリ頭を

押しつけてくるので…

シルフィは、

「だから!

するんじゃない!!」

…ってか、

ドリルって!なんだよ!?!と叫ぶのだった…。

そんな、

二人のやりとりが

続いているうちに…

今まで、ずっと…

中に妖精を入れた木箱を
両手で抱えていたポチが

「あの・・・」

そろそろ箱持つの
疲^{つか}れて

きたんですけど・・・」

二人の話に口をはさむと

クールアイが

「むっ…そうか・・・」

もう一人いたんだな・・・」

ようやくポチが

気になったようなので・・・

そこで、ポチは

「ジパング語

うまいですねー・・・。」

…と、

無^ぶ難^{なん}な

第一^{だいいっせい}声をかけるのだった・・・。

【Bパートへ続く・・・】

第6話「サイレントキル」Bパート

心霊科学研究所

第2実験室

両手で木箱を抱えた…

コボルトのポチは、

頭部の左側の髪を

青いリボンでテールを

作った少女、シルフィと

黒衣の服に身を包んだ、

長身の青年である

クールアイと一緒に

午前中なのにうす暗い

その実験室の中に、

立っていた…。

そんな中…

白いジャージを着た

ポチが箱を抱えながら

クールアイの方を見て、

ポチ

（傭兵としても…

所長としても、
ずいぶん若いな…)

そう思っている…

クールアイ

「お前が雪うさぎが
さがしていたという
コボルトか…
しかし、ヨメは、
渡さんぞ。」

クールアイが

そう言ってきたので…

そのとなりで立っていた
シルフィが

「いや…あんだ、
いろいろと使う言葉を
間違ってますから…」

この場合は、娘は、渡さんでしょう
…と、言っているうちに

クールアイは、
両足のヒザをついて、
両腕で、

シルフィの身体を背後から抱きしめながら…

「まあ、そういうな…

ヨイデハナイカ、
ヨイデハナイカ。」

…と、言うので、
シルフィは、ジタバタと
もがきながら…

「ええい！
寄るな！触れるな！
あっちいけ！！」

見事な

言葉の三段活用を使って
その場から、
離れようとする…

ポチも

「シルフィも本気で
嫌がつてるようなんで、
そろそろ離して
あげてください…。」

そう言うので、
クールアイは、
シルフィの身体にまわした両手を離して、
立ち上がり

クールアイ
「まあ、そういうな…
これは、

オレとシルフィさんの
恒例こうれいの行事という奴だ。」

…と、ポチに言うと…

シルフィは、
閉じた両目の
左側の眉をピクピク
動かしながら

「初耳だな…
いつの間に、そんな行事が出来たんだ？」

そう言うので、

それに対して
クールアイが

「ついさっき。…つつか
シルフィさんは、
オレの嫁。」

そう言えば…

両目を開けたシルフィも

「待て、さつき…
何か、ボソッと、
とんでもない事を
つぶやいて

なかつたか？」

そう返すのだった…。

それから、

クールアイは、

「いつまで、箱を
持っているつもりだ？」

ポチ

「あつ、す…すみません」
木箱を足元の方に置く
ポチの方を見て…

クールアイ

「あんな長い時間、
持ち続けていたら、
疲れるだろうに…」

ボソツと、

つぶやいていたので…

シルフィ

「誰のせいだと思
っている！」

…と、シルフィが言つと

クールアイ

「オレ達」

そう言つて、

シルフィの方を見るので

シルフィは、

（あー！殴りてえ、

こいつ…）

…と、

頭の中で思いながら、

顔の前で…

左手をギュツと

握りしめるのだつた…。

そのあと、シルフィは、

クールアイの方を見て

シルフィ

「あんた…胸のどこか…

ケガしてるんじゃない？」

…と、クールアイに

聞いてきたので、

クールアイ

「ああ、前の戦いの時に…盾にしたた死体の身体から弾が貫通して…。

至近距離から

銃を撃たれたからな…

でも、良く気づいたな」

そう言つて、
驚ろおどいていると

シルフィ

「あんたの腕の中で、
暴れたあは時に…

顔には、

出さなかつたようだけど
そんな感じがしてね…」

そう言つと、

シルフィは

「ちよつと、そのまま、
立つてなさい。」

そう言いながら、
クールアイのお腹の前に
左の手のひらを向けて…

シルフィ

「我、

オリエンス＝シルフィードは、
癒しの風ラフィエルの名を借りて
ささやかな、風を起こす
吹け風よ。

ハープウインド！」

エレメンタルソングと
呼ばれる聞いた事のない
言葉を発音しながら、

左の手の平から、

黄緑に光る風を放出する

すると…その光の風は、
クールアイの身体全体を

小さな竜巻のような
螺旋の風となって
包み込む…

少し時間が経^たって
その身体を包み込む
小さな竜巻がおさまると
クールアイは、

「ありがとう…」

…と、礼を言^つたあと…

クールアイ

「でも…

まわりの紙は、出来れば
散らかさないで
欲しかったな…」

シルフィ

「ごめん。」

両手を合わせる
シルフィを前に…

実験室の中にあつた…

いくつかの紙が

癒しの風に巻き込まれて

飛んでしまった事に

嘆く^{なげ}のだった。

そのあと…シルフィと、

クールアイは、

風で散らかった紙を…

ポチ

「あつ！

オレも手伝うよ。」

箱を置いたポチを加えて
かたずけると…

そのあと…

クールアイは、

木箱の置いてある方
に行つてから…

両手で木箱のフタを
開けて

その中から…眠っている
蝶のような羽がついた
紅い髪の妖精を
両手ですくいとって、

クールアイ

「ふーむ…

相変^{あいか}わらず、

いい仕事してるな。」

クールアイが

そう言うので…

シルフィが、

「ホントに、その器で
良かったの?」

その事について聞くと
クールアイは、

「もちろん…

MOEドールほどじゃない
けど・・・

妖精^{じゅよう}タイプもけっこう
需要が

多いんだ…。」

そう答え…

それを聞いたシルフィが

「ふーん…」

じゃあ、悪いけど、
いつも通り…お願いね」

そう言つと…

クールアイが

「今日は、いつもの半分
で、いいんだよな…」

…と、

言ってきたので、

シルフィ

「うん。そうね…」

その変わり…」

シルフィが、

そこまで言つと…

クールアイが

「分かっているから…
心配するな…」

そう言い残して…

両手で、すくいとつた
妖精をフタのあいた
木箱に戻すと…

奥の方に何かを

取りにいき…

そして…そのすぐあと…

クールアイは、

大きな封筒^{ふうとう}

を、何かの小切手の
ようなものと一緒に
持ってきて…

まずシルフィに…

クールアイ

「本当に今月は、
これだけで
間に合うのか？」

…と、聞きながら、

シルフィ

「うん。

先月の残りも少しだけ、
残ってるし…」

そうシルフィが
答えたあとで…

クールアイ

「そうか…」

…と、クールアイは、
大きな封筒と一緒に
持っていた

小切手のようなものを

シルフィの左手に
手渡し…

そのあと…
ポチの方に行って

クールアイ
「ほら、これは、
キミのぶんだ…。」

そう言って、

大きな封筒のようなものをポチの両手に手渡すと…

ポチ

「これは？」

…と封筒を両手に持って
…
尋ねるポチに…

クールアイ
「ヘルメス学院に
入学するために
必要なものだ…
詳しくは、
シルフィさんに

聞けばいい…。」

クールアイは、そう話し

ポチ

「????は?。」

突然の話で

クールアイの話の内容が
わからない…ポチに

シルフィ

「じゃあ、

帰るわよ、ポチ。」

左手に小切手のようなものを持ったシルフィが
声をかけて…

「あつ…いや…ああ…
わかった…。」

ポチが、

それに同意すると…

クールアイ

「では、

名残惜しいが…
なごりお

さらばだ、

シルフィたん。」

シルフィ

「ええい！！だから、抱きつくなー！」

クールアイの腕の中で、

シルフィが

ジタバタしたあと…

シルフィとポチは、

第2実験室を

あとあとにするのだった…。

そして…それから、

心霊科学研究所を

あとにして…

ヘルメス学院から

出たポチは、

「それが生活費になるのか？」

シルフィが左手に持った

小切手のような紙に

ついて、聞いてみると…

「そうね…

スコール達の組織は、

私から買い取った

いろんなタイプの

ホームンクルスを、

売って…資金調達を
してるようだから…。」

シルフィがそう
言うのだが…

ポチは、

「だけどさ…
ペットみたいに
すぐ捨てられるような
人間に、それを
売ったりしたら…。」

その事が心配すると…

シルフィ

「大丈夫よ。」

…と、

シルフィが、

「そこら辺の心配が
ないから…あたしも、
彼らに協力して
もらってる訳だし…」

そう話すところから…
ポチは、

シルフィが

クールアイ達の組織を
信用している事がわかり
ほっとすると…

そのあと、すぐに
隣で歩いてるシルフィに

ポチ

「じゃあさ、本題に
移るけど…これ何？」

歩きながら…

両手に持った封筒を
シルフィの前に出すと…

シルフィは、

「ヘルメス学院に
転入するために必要な
書類よ。」

ポチに、その封筒の
中身について話し

それを聞いたポチが

「そんな事…
オレ、一言も頼んでは…」

右手に封筒を持ち変えて
そのあとを言おうと

すると・・・その前に

シルフィ

「でも、ジパングで何かしたいと思うなら…

まずは、そこに

行った方がいいわ・・・。

…とは、言っても

転入試験があるから…

それに受かったら…って話だけど…。」

シルフィがそう言うので

ポチは、歩きながら…

「試験？」

その言葉をくり返すと…

シルフィ

「そう…試験で、

ある程度良い成績を

とらなければいけないんだけど…

まあ、どんな問題が

出るか、

だいたい把握^{はあく}

してるから心配ないけど

試験対策は、一応

やらないと…」

シルフィが顎^{あご}に
右の人差し指を
つけながら、
そう話すので…

その隣を歩きながら
ポチが

「だから勝手に話を…」

進めるなよ…と、
言おうとした時…

シルフィは、顎から
右手を離して

シルフィ

「だけど面接用に
制服とか買わないと…」

服は、あたしが
見立てるから…

一緒に買いに
行きましょ。」

ポチ

「あつ…おい。」

その右手で
ポチの白いジャージの
左の袖^{そで}を

引^ひつ張^ひつて、
先^いを急^そぐのだつた…。

【第7話へ続く・・・】

第6話「サイレントキル」Bパート（後書き）

次回予告

道路の歩道の上で、

みぎわき
右脇の方に

大きな封筒と

たた
畳んだ服の

はい
入った紙袋を

抱えたポチと…

白いワンピースの

ポケットの中に

お札と小銭を入れたいシルフィと一緒に
歩いていた……。

その途中でポチが

「なあ、

いくら何でも

茶色い制服は、

ないんじゃないか？」

…と、隣を歩く

シルフィに聞くと…

頭の左側の銀の髪を
青いリボンで結んで

テールを作った
シルフィは、

「いいのよ。

茶色い制服だから…

チャ克蘭よ。

面接とかに印象的
じゃない？」

青い靴で歩きながら
ポチを見上げるので…

白いジャージを着た
ポチは、

「そうなのか？

オレ、学校については、
良く知らないけど…

何となく違う気がするぞ…」

歩きながらシルフィに
言うところ…

シルフィは、

「そうかな…」と、

顎あごの方に一度

左手の人差し指の指先を

近づけてから…

すぐに、その左の人差し指を
顎^{あご}から離して…

シルフィ

「まあ、
買ってしまったものは、
しょうがないじゃない」

試験の日は、
チャクランを着て
茶色い靴を履いて
いくわよ。…と、
シルフィが歩きながら
言うので…

ポチは、犬のような口を
あけて…
ハア〜と、
ため息を吐いて

そのあと、シルフィに

ポチ

「じゃあ、
ヘルメス学院について…
聞いていいか？」

そう言って、

話題を変えると…

シルフィは、
ポチの隣を歩きながら…

「いいわよ…。」

…と、ポチに
ヘルメス学院の事を
話し始めた…。

シルフィ

「ヘルメス学院は、
エリート科と普通科の
二つの科に分けられていて…

ポチが試験で受ける
普通科が、

年齢制限なしの

50名定員なのに対し、

エリート科は、

小学生の頃から、

現役の児童達が

受けなければならず…

定員も7名のみと、

かなり厳しい条件に

なっているわ…。」

そんなシルフィの話に
ポチは、

「なんでエリート科は、

そんなに厳しいんだ？」

その事について聞くと…

シルフィ

「それはね…

エリート科の卒業生には
ジパングでの

国家錬金術師の
試験資格が与えられる
からよ…。」

他にも、有名魔術学校へ
転入できたり、

魔術に関わる仕事に
就職するのに

有利になったり…

いろいろ特典は、あるが
やはり、エリート科に
入らせようとする児童の
親御さんの目的は
ほとんど、それらしい…

シルフィ

「おかげで今年

普通科を受けた人達の
ほとんどが他の学校の
^{すべ}滑り止めだった
のに対して…

エリート科は、

受けたのが、幼児だけ
だったのにも関わらず
募集定員の

72倍の倍率だったって
聞いてるわ…。」

シルフィが、
そう話すので…

ポチ

「すごいな、
エリート科は…」

もし受けるのが
こっちの方の科だったら
とつくにあきらめてるな
…と歩きながら
考えていると…

そんなポチの考えを
読んだのか…

シルフィ

「でも、まあ…
あなたの受ける普通科は
今年は、0.75倍しか
なかったと聞いてるし…
生徒の半分くらいが
あなたと同じ亜人種や
大人だったそうだから…

勉強さえしつかり
出来てれば必ず
受かるわ。」

そう言つて…ポチを
安心させたシルフィは、

シルフィ

「それに…あたしは、
できればポチに…
学校に入^{はい}つて、
学生生活を楽しんできて
ほしいな…。」

そう思つてゐる事を話し…

ポチ

「自分も
学生だからか？」

…と、ポチが話すと、

シルフィは、

「ん。正確には、
フワリがなんだけどね」

あたしは、あくまで
フワリの前世よ…と、
ポチに言つたあと…

シルフィ

「あっ！家が
見えてきたわ…。
早く帰りましょ。」

そう言つて、

歩く足を速めて

ポチの先を歩くので…

ポチは、

「えっ？あつ…いや…」

…と、

少しとまどいながらも、

封筒や紙袋を

右腕や右手を使って

抱えながら…

シルフィのあとを

追うのだった…。

次回

第7話【ヘルメス学院】
お楽しみに

最終話【ヘルメス学院】Aパート

夜。電気がついた

フワリの家

一部屋で…

白いジャージを着た

ポチが

机の前の椅子に座って…

机の上でノートを開いて

一人、勉強していた…。

そんな中…

コンコン…と、

部屋のドアを叩く音がして…。

ポチが動かしていた…

右手に持った鉛筆を止めて…。

「はい。」

…と、答えると…。

????

「はい
入るわよ。」

ミルクティーを

入れた皿をのせた

お盆を

両手に持ったシルフィが
ガチャツと…部屋の中
に入^{はい}ってくる…。

その時、

椅子に座ったまま
うしろを向いたポチが

「あれから・・・
毎晩ご苦労様だな…
自分達の仕事もあるのに
大丈夫なのか？」

…と、

シルフィに声をかけると

シルフィ

「大丈夫よ。

それに、あなたに学院の
転入試験をしろと…

言ったのは、あたしだし
そう言ったぶんの責任が
あるわ・・・。」

シルフィがそう言うので

ポチは・・・

「そうか・・・
じゃあ、オレが

質問ばかりして…

ずっと…ドアの前に、
立たせてるのも悪いから
早く、ここに来て
勉強を教えてくれ…。」

シルフィ

「うん。わかった…。」

シルフィと、

そんなやりとりを
しながらも…頭の中で

ポチ

(でも…少し

がんばりすぎな

気がするな…

無理して、風邪とか

ひかなきゃ、いいけど)

そう思いながら、

顔を机の方に戻し…

鉛筆を持った右手を

動かそうと…

机の上の方に意識を向けるが…

そんなポチの心配は…

数日後、現実のものとなる…

夕方、フワリの白い部屋・・・

電気がついた、

この部屋のベッドの上の
白い布団の中で・・・

???

「うつ・・・」

こほっ、こほっ・・・」

シルフィが寝ていた・・・。

その枕の横では、

そこに椅子を持ってきた
ポチが・・・

持ってきた椅子に
座すわって・・・

「だから、無理するな

・・・と言ったのに・・・」

・・・と、ぼやいたあとで

一度、ハァ・・・と、

ため息を吐く・・・。

すると・・・シルフィは、

「ごめん。」

長いあいだ、

フワリの身体を

借りてたものだから…

つい…体調の変化に

気づかなくて…。」

そう言うので、ポチは、

「だから…。」

風邪で寝込んでも、

ずっと…自分の人格で
いる訳なんだな…。」

…と、病気になっても、

フワリの人格にならない
理由を知ると…

シルフィも当然でしょ

…と、ばかりに

「だって、あたしの

やった事が原因で、

こうなっただんだもの…

だから、この風邪は、

責任をもつて、

あたしが対処するわ。」

そう答えるので…

ポチは、

「まあ、そうしたいなら
すればいいさ…」

オレも

シルフィの立場なら

同じ事を

考えただろうし…。」

そう言いながら、

頭の中で…

（たぶん、フワリも

そんなシルフィの考えを
理解しているから…

何も

言わないんだろうな…）

まだ、小さいのに…

他の人格の事を

よく理解してるな…と、
感心するのだった。

それから、ポチは、

シルフィが、ずっと…

布団の中に身体を

寝かせたまま

話しているので…

ポチ

（そろそろ部屋を

出ようかな…）

…と、考えていると、

そこに、シルフィが

「でも、情けないわ…」

呟くように

そう言っていたので、
気になって…

ポチ

「どうした？」

なるべく

優しい口調にして、
そう話すと…

それで気を許したのか…
シルフィが、

「明後日あしたが

ポチの試験日なのに…」

…と、くやしそうに
話すので…

ポチは、そう話す
シルフィの顔を見て、

「泣いてんのか？お前」

つい…その事に口が
いってしまつと・・・

シルフィは、布団から、
バツ…と、上半身を
起こして…

ジワツと紫色の両目に
溜^たまつた涙を…

着ている黄緑の
パジャマの左腕で、
ゴシゴシこすつたあとで

シルフィ
「違うわ。

これは、水滴が目の方に
落ちてきたのよ。」

そうポチに話すが…

さすがに、これには、
ポチも…

「す…水滴つて…」

（天井にも屋根裏にも
穴は、あいてないし…
第一、今日は、

雨が降ってないのに…)

すんなり納得して、
いいものか、どうか…
考えていたが…

その時…

ポチの考えてる事に
気づいて…

シルフィ

「な…何よ…」

頬を薄い紅色に染めるシルフィの

ある部分に目がいき

ポチ

「そういえば、今日は、
髪…伸ばしたままなんだな…」

頭の左側の銀髪を
いつものように、
リボンで
結んでない事を
指摘すると…

シルフィ

「当たり前じゃない！

いくら今の姿が幻でも、
風邪をひいたら、
リボンは、取るわよ。」

まあ、正確には…

取った姿になったんだけどね…と
シルフィが話すので、

ポチは、

「そうか…」

…と、犬のような口で
バウバウツ…と笑って、

そんなポチを見て…

シルフィ

「こらー、笑うな！」

そう言ったあとで、

両手で持ち上げた布団で
恥ずかしそうに…

口元を隠す、シルフィに

椅子から立ち上がって、
ポチは…

「じゃあ、オレ…
お粥かゆでも

作ってくるよ。」

そう言つて

部屋のドアに向かつて
歩くので…

ベッドから、上半身だけ
身体を起こしていた
シルフィも、

「ちよつ…ちよつと
待つてよ。

お粥くらい、
今のあたしでも…」

両手にもっていた
布団を取つて、
ベッドから離れようと
するが…

立ち上がつて、
数歩を歩いた時に

シルフィ
「きゃ！」

スッテン…と、

またマンガで見るような

左足が膝^{ひざ}から
曲^まがって…

背伸びするように
両手を伸ばした
見事なコケ^{かた}方を
していた…。

いっほう
一方

ドアを開けようと
していたポチは…

シルフィがコケた時の
音を聞いて

うしろを振り向くと

なんと、シルフィが
うつ伏^ぶせに
倒れていたので、

シルフィのところに
行って

両手を使って
助け起こし…

シルフィの首のうしろと
両足の膝の裏の方に

両手をかけて抱えるが…

それから…ベッドの上に
シルフィの身体を乗せる
までのあいだに

シルフィが…

（む…胸がドキドキする
あー！もう！
静まれってば！）

頭の中で
そんな事を考えながら…
恥ずかしそうに
ポチの方を見るので

気になってポチが
シルフィの方に視線を
向けると…

シルフィは…サッと、
視線を合わせないように
顔を横に向け、

ポチが視線を
ベッドの方に戻すと、

またシルフィが
チラッと、ポチを

見ているようなので…

ポチがシルフィの方に
視線を向けると、
またサツと顔を横に向けるので

ポチ

（やれやれ・・・）

…と、ポチは、
シルフィをベッドの上に
寝かせるのだった。

そのあと…
布団をかぶった
シルフィは、

「でもポチは、
コボルトで…手足の爪が
犬の方に近いから・・・
料理とか…作りづらいん
じゃないの？」

そうポチに話すと…

ポチ

「いや…大丈夫だろ。
いつもシルフィが
作るのを見てるし…」

そうポチが言うのを聞いて…
シルフィは、

「なっ・・・」

恥ずかしそうに
頬を薄い紅色に染めて

それからポチに

シルフィ

「い…いいわ。

そこまで言うのなら…
大人しく待ってる…。」

…と、話すのだが…

ポチ

「分かった。

けど…どうしてこっちを
見ないんだ？」

シルフィ

「か…風邪がポチに、
うつると困るからよ。」

…と、シルフィは、

ポチの方へ背中を向けて

ポチが部屋を出るまで

なぜか？ずつと…
横向きに寝ていた…。

しかし…

ポチが部屋から出たあと

シルフィ

（な…なんだろ。

なんとなく…いやゝな
予感がするんだけど…）

そして、そのあと…

シルフィの不安は、

現実のものとなる…。

それから…少し
時間が経^たつと

お粥の入った
大きなお^{わん}碗を、
乗せたお^{ぼん}盆を…

ポチが両手に持って
部屋の中に入って来たので…

シルフィは、
ベッドから起きて

それから…

ポチが正座している

テーブルの向かいの場所で正座をすると…

シルフィ

「いただきます。」

…と、自分の前に出されたお椀の中のお粥を

左手に持った

スプーンのようなもので

すくいとり…

それをパクツと、

口の中に入れた。

しかし…

それを口に入れた

途端^{とたん}

シルフィの体温が

一気に下降し…

シルフィ

（な…何これ…

なんで、こんなにお粥が

不味^{まず}いの…。）

なんとか…その一口を

モグモグ…と食べ終わり

もう一口^{ひとくち}

食べる時に、

シルフィ

（分かつてるの。ポチ…

料理が不味くて

許されるのは、

子供の時だけなのよ。）

そんな事を思いながらも

それから2度3度…

左手に持ったスプーンを

口に、はこんでいると…

正座から

あぐらに変えたポチは、

シルフィが

顔に何本も線がはいった
ような表情をしながら…

滝のようにダラダラ汗を
流している事に気づき…

ポチ

「どうした？もしかして
不味かったか？」

…と、声をかけてきたので…

シルフィは、一度

口に、はこぶ手を止めて

（ど…どうしよお）
素直に不味いって言えば
いいかも知れないけど…
せつかく、あたしのために作ってくれたんだから…
それは、冷たいと思うし
うゝん…ここはまず…）

シルフィ

「イマイチね…
これから、あたしが
あんたでも作れるような
料理を教えるから…
試験が終わったら、
一緒に作るわよ。」

そう言いながら頭の中で

シルフィ

（それで、いいわね。
フワリ…）

また、たまに

あんたの身体を借りるわよ…と、
フワリに呼びかけ

それにフワリが

（うん いいよ。

ポチも

「よろしく頼む」

…と言ってるようだし)

…と、答えたので、

シルフィ

(分かったわ…。)

…と、シルフィは、
また左手を使って…
お粥を全部、
食べきるのだった…。

しかし、そんな無理が
たたってか…
シルフィは、お粥を
食べ終わると…すぐに
テーブルを離れ

ポチに…

「もう、あたしの事は、
いいから…
あんたは、明後日の
試験の事を考えなさい」

そう言つて

ベッドの上で横になると

ポチも

「分かった。」

上に、お椀やスプーンを
乗せた、お盆を持って…
テーブルから立ち上がり

ドアの方まで行つて
部屋を出ようとするので

ドアノブが閉まる音が
聞こえたシルフィは、

その方向に背中を
向けたまま…

シルフィ
（これは、なんとしても
明日までに風邪を
治さないと
いけないわね。）

ダー…と、滝のような
涙を流すのだった…。

…そして 試験当日

フワリの家の前で…

茶色い制服を着たポチは
黒く大きなカバンを
右手に持って…

水色のワンピースのようなものを着たフワリに見送られていた……。

フワリ

「いってらっしゃい」

そう言って、

左手を何度か横に振るシルフィに

ポチ

「あっ……いや……ああ……
行ってくるよ。」

そう言って、

ポチは、背中を向ける……

ポチ

（ふう……やっぱり少し
緊張してるな……でも……）

空を見上げると……

白黒だったはずのポチの
視界に一瞬、

青い色がかかる……。

カバンを右手に持った
ポチが

うしろを振り向くと……

そこには・・・

背中のうちろの方で

両手を組んで、微笑む

フワリの姿があつた…。

目を閉じて

ほがらかに微笑む

フワリを見て

ポチは、

（そう言えば・・・

ときどき、こんなふうに

景色の色が感じられる

事があつた・・・

それは、まさか…）

そう…それは・・・

ポチが気づかないような

ささやかなものだが

確かにフワリの魔法だったのだ…

ポチ

（ありがとうな

フワリ・・・）

頭の中で、そう言つて

ポチは、学院への道へと

身体を戻す・・・。

そして、ポチは、

学院へ向かう途中で

張りつめていた気持ち

いつの間にか：少しだけ
和^{やわ}らんでいた事に気づくのだった・・・。

【Bパートへ続く・・・】

最終話【ヘルメス学院】Aパート（後書き）

え〜と、今回は、
シルフィが身体を壊して
風邪をひいてしまう
話です。

なぜこんな話を
思いついたかと言うと
自分も風邪を
ひいたからです（笑）

お願いですから…

前回みたいに癒しの風で
治せばいいだろ…という
ツッコミは、無しに
してください（泣）

第一、部屋の中で使うと
ものが散らかるんですよ
あの魔法 《言い訳になってねー》

最終話【ヘルメス学院】Bパート

夜。フワリの部屋…

この時は、部屋の中に
電気がついてなくて…
月の光を頼りにしていた

そんな中、

茶色い制服を着たまま
あぐらをかいてる
コボルトのポチの

テーブル向かいで、
正座をする。

袖の大きい白い服の下に
赤い袴はかまのようなものをはいた
黒く長い髪の少女の姿が
あった…。

その姿を見て、ポチが

「しかし、シルフィも
そうだけど…

みんな、
もみあげのところが
長いな。」

…と、そう言えば…

その背中にとどくような
長い髪をしたその少女
鈴鹿もすすつか

「そうじゃな…」

しかしな、ポチ殿。

おなごに対して

面と向かって、

そう話すのもどうかと
思うぞ。」

…と返すので、ポチが

「うおふ？あつ…いや…
ごめん…。」

そう言ってるあいだに

鈴鹿は、自分の前の
テーブルの上に
置いてあつた

湯飲みわん碗を

左手に…

底の方を右手に持って

中のお茶を…ずず〜
と、飲むと…

鈴鹿御前

「うむ。」

良いお手前であつた…」

一人で満足して、

湯飲み碗をテーブルの上に置き

それからポチに…

鈴鹿御前

「それでポチ殿
試験の方は、

どうじゃった？」

今日やってきた。

試験の事を聞いてきたので…

ポチは、試験の内容を

「あ…いや…そうだな…

最初は、性格診断から
始まって…」

…と、

テーブルの向かいで
正座している鈴鹿に
話し始めた…。

ポチの話では…

性格診断の筆記が終わると…

一度、校舎の外に出て

まず懸垂^{けんすい}か

腕立てふせの二つのうち

どちらか選択したものを
選んで…

それをする必要がある
らしい…。

ポチ

「オレのような

亜人の場合…

懸垂なら7回以上…

腕立てなら40回以上が

合格ラインらしいんだけど…。」

もちろんポチは、

腕立てを49回して

これは、合格らしい…

ポチ

「次は、体力で

校庭を何周か、まわって

それを、

決められた一定の
時間内に走る事を

テストされたな…。」

これは、だいたい
2000メートルを
10分以内で走れば…
まず合格らしい…。

ポチ

「その次は、
素早さを見るための
反復横とび…
これは、1分で20回以上
とぶ事が要求される。」

ちなみに、これは、
普通の人間なら…
15回以上で良いらしい…

そこまで聞いて、
鈴鹿は、

「ふむ。どうやらどれも
最低限の体力があれば…
合格できるものばかりじゃな…」

そう話をまとめると…
ポチは、

「まあ、そうだな…
次は、校舎の中に戻って

筆記試験なんだけど…」

…と、筆記試験について
話しはじめ・・・

ポチ

「筆記は、一般教養と
宗教について

書くんだけど・・・

宗教は、

自分の信じているものから…

得意なものまで…

好きなものを

選択できる・・・。」

そして、宗教の筆記は、

問題を解く事より、

むしろ感想を書く事が

要求されるらしい…

ポチ

「筆記は、

半分以上できれば

いいらしいんだけど…

宗教で書いた答えが、

どう点数に結びつくのか

わからないから、

予想できないんだよな」

ポチが、

そう不安を口にすると…

鈴鹿御前

「まあ、そなたは、
真面目そうであるから…
心配ないじゃろ。」

そう言ったあと…

さらに、鈴鹿が

「それで…問題は、
それで終わりなのか？」

…と、聞いてきたので…
ポチは、

「いや…最後に
もうひとつ、運をはかる
テストがあつたな…」

鈴鹿御前

「運？」

…と、その言葉をくり返す鈴鹿に

ポチは、首を縦に振って
コクリと頷^{うなず}き

「トランプや麻雀などを
使って…」

一時間で、
どのくらい良い手を出せるか…を
ためすみたいだ。」

ちなみに…

大きな手をだせば
高い点数を取れるようだが…
普通は、出しやすい手を
何度もだして、点数を
積み重ねていくのが
良いらしい…。

ポチ

「まあ、オレは、
トランプの
ブラックジャックを
選んで…
15から19あたりを何度も
出した…。」

ポチが、そう言う…

鈴鹿は、口元に
左手の伸ばした4本の指の指先をそえて…
クスリと笑い

鈴鹿御前

「ブタを出さぬように
配慮するあたりが
そなたらしいの…。」

おかげで強い手も出せぬ
ようじゃが…と、

鈴鹿は、
口元から左手を離し…

そのあと・・・

鈴鹿は、テーブルから
立ち上がった…

「まあ良い。これで、
ポチ殿の試験の事は、
妾にも理解できた…。
どれ、それでは、妾が
でざあと…と申すもの
でも作ってきてやろう」

だから待っておれ…と、

両手に持った、
ポチの使った皿の上に
湯飲み碗をのせて

部屋を出るのだった…。

それから…何日か

日にちが過ぎ^すて

夜。

青い月の光だけが照らす
フワリの家の間で…

茶色い制服を着たポチが
テーブルの前で、
あぐらをかいて
座っていた…。

テーブルの上には・・・
火がついたロウソクを
上に乗せた

銀色のロウソク台の他に

きんとき豆のチリソース煮や…
トルティヤのグラタンなどの、
さまざまな料理が…

それぞれの入れ物の中に
入れられて、
置かれていた。

そこに…コップやら、
皿やら、湯飲み碗やら…
さまざまな
飲み物を入れたものを
乗せたお盆を、

両手で持った

鈴鹿がやって来て

鈴鹿御前

「今宵は、こよひ

ポチ殿の合格祝いじゃ。
遠慮せず、たくさん
食べると良いぞ。」

お皿は、ポチの前に、
それ以外の入れ物は、
自分の前に置いて…

それからお盆は、
自分の席の右横の方に
置くと…

ポチのテーブルの
向かいに正座して、
座りこんだ。

それから…ポチは、
テーブルの上に並ぶ…
いろんな料理を見て

「これ全部、鈴鹿が…」

・・・と、白い服の下に
赤い袴をはいた鈴鹿に
聞くと…

もみあげの方の黒髪が

胸にとどくくらい長い
鈴鹿は、

「いや…全部
シルフィの料理じゃ。」

妾は、料理を
はこんだだけじゃ…と、
ポチに話し…

ポチ
「うおふ？」

鈴鹿御前
「いやな…
和食なら妾にも
作れるのじゃが…
ぱーていと申すものなら
異国の料理の方が
向いてると考えてな…
そこは、料理上手な
シルフィに
頼んだのじゃ…。」

理由をポチに話すと、
それに対してポチが
答える前に…

シルフィ

「そんな話は、あとでいいでしょ…。」

今は、ポチの合格を祝って、パーティーをはじめましょ。」

…と、鈴鹿の姿のままでシルフィが話すので…

鈴鹿とポチは、

いただきます…をしてから…

料理を食べはじめた。

それから何分経った、食事中…

背中に、とどくくらい髪の高い鈴鹿の姿のまま

鈴鹿とシルフィが…

鈴鹿御前

「しかし…」

異国の料理というのも、なかなかの美味じゃのう和食しか知らぬ妾にも作れるじやろうか？」

シルフィ

「大丈夫よ。あたしは、料理に手間をかけるのが好きだけど…」

簡単な料理の作り方も知ってるから…」

あとで教えてあげるわ」

鈴鹿御前

「おお！

それは、ありがたい。では、

あとで教えてもらう事としようかの。」

それぞれの声に切り替えながらそんな話をしているうちに…

ポチは、

鈴鹿のテーブルの上に並んでいる…

ブドウジュースと

日本茶と

キャラットジュースの

3種類のジュースを見て

ポチ

「それぞれの性格が、でているな・・・」

どれが誰の飲み物なのか
わかるな…と、

ポチが考えている事に
気づいたのか・・・

鈴鹿が…

「妾は、本当は、
日本酒の方が

飲みたかったんだがの」

そうポチに話せば・・・

シルフィも

鈴鹿の姿のままに

「あたしも本当は、

ブドウ酒が

飲みたかったんだけど…

まあフワリの身体がまだ
子供のものだからね…」

お酒の方を飲まない

理由を話すと…

それを気にしたのか…

フワリ

「ごめんね…鈴鹿ちゃん
シルフィちゃん・・・」

今度は、フワリが…
鈴鹿の姿を借りて、
そう言うので

鈴鹿は、自分の声で、

「気にいたすな…
いくら魔法使いでも
こればかりは、
どうしようも
ないからの。」

…と、
話をまとめるのだった。

そのあと…
ポチと鈴鹿は、
テーブルの上の料理を

手にとった箸^{はし}や
スプーンなどを使って
食べつくし…

皿などの
料理の入れ物^{から}の中を、
ほとんど空に
すると…

鈴鹿が自分の着ている
巫装束^{みこ}の
衣装^{いしょう}を見て

「しかし…かつて自分の
着ていたものが
特殊な店にいかぬと
買えぬ。という
状況は、どうにか
ならぬものかの…。」

…と、つぶやくように
そう話すので…。

シルフィが
鈴鹿の姿を借りて

「何、贅沢ぜいたく
言ってるのよ。

あたしが着ていたもの
なんて…もう存在すら、
してないんだから…
ガマンしなさい。」

凜りんとした声で
そう話すので…。

それまで話を聞いていた
ポチが…

「身体と同じように
服装とかも光を利用して
変えられない
ものなのか？」

…と、前に聞いた…
目に映る光を利用した
話をもつてくると…

シルフィは、
鈴鹿の姿のまま

「それは、出来るわよ。
出来るけど…
身につけているものを
見た目だけ、変えたって
虚^{むな}しく
なるだけじゃない…。」

テーブルの前で
正座をしたまま…
そう話し…

それを聞いて、ポチが

「でもシルフィは、
自分の姿になると…
リボンの位置を
変えるよな…」

ついでにリボンの
大きさも…と、
リボンの事を
指摘^{しってき}すると…

鈴鹿は、頬ほおを
薄紅うすべにいろ色
に染めて…

「そ…それと、
服装の話は、別なの！」

…と、シルフィの声で
話すのだった…。

そのあとも…シルフィは
鈴鹿の姿のままで

「じゃあ、そろそろ…
食器を片づけましょう。
あと、食器が片づけたら
洗いものは、あたしが
やるから…。

ポチは、タオルを
濡ぬらして、
テーブルの上を
拭ふいてね。」

お盆をテーブルの上に
置いたあと…
立ち上がりながら、
そう言っ

それに対して、ポチも

立ち上がった…

空になった入れ物を

お盆の上に乗せながら…

「わかった。」

…と、答えると…

鈴鹿は、

空になった入れ物を

全部、お盆の上に乗せて

そのお盆を両手に持って

台所の方に歩くのだった…。

そして…そのあと

鈴鹿の姿を借りた

シルフィが台所で

洗い終わった食器を…

全部、片づけると…

鈴鹿は、そこから…

自分の意識に戻り

そのあと、一度

フワリの部屋に

立ち寄ってから…

ポチのいる…

居間の方へ戻って

テーブルの前で、

正座しているポチに

鈴鹿御前

「ポチ殿…これから、
披露する舞は

妾からの贈り物じゃ。」

そう言つて…

左手を振る事で、

いつの間にか左手に

持っていた

赤色の扇子を

バツと開き

その開いた扇子を

ひらひらと、動かしながら…

テーブルの前で正座する

ポチの见ている前で…

舞い踊る…

それは、

居間の中にいるのを

配慮してか…

足の動きが少ない

静かな舞だったが…

少し時間^たが経つと

それを見ていた

ポチの白黒の視界が、
ねじれるように
グニヤリと曲がり…

ポチは…

鈴鹿の紡^{つむ}ぎだす
幻想の世界へと
入っていった…。

ポチ

「こ…これは…」

緑の木や…

青や桃色などの…

色とりどりの花が広がる
その楽園で…

ポチが見たものは、

コボルトになつてからの
白黒の視界では、無く…

過去、

人間だった時に見た…

たくさんの
世界の色だった・・・。

ポチ

（色を

感じてるんじゃない…

今。オレは、本当に

世界の色を見ている…）

太陽であるレナスの光が

まわりの緑の木の

上の方から射し込む、

その世界で・・・

????

「ポチ！」

ポチを呼ぶ声が聞こえる

ポチが

その声が聞こえた方へ

顔を向けると…

ポチ

「うおっ！」

白い服の下に

同じ色のスカートをはいた…

フワリが歩いてくる…。

だがポチが驚いたのは、

そのフワリを

はさんで歩く、

二人の娘を見たからで…

フワリの両隣を歩く

二人は、どちらも…

150センチくらいの身長で…

90センチのフワリより

あきらかに高かった…。

しかし…白黒世界と違う

色つきの世界とは、いえ

フワリ右隣を歩く娘は、

どう見ても…さつき、

現実の世界でも着ていた

巫装束の衣装を着た

鈴鹿に見えるし…

フワリの左隣を歩く娘は

緑色のブラジャーの

ような胸当ての下に…

白いミニスカートを

はいていた…が、

頭の左側の銀髪を

青いリボンで

まとめているところを
見ると・・・その娘は、
シルフィにしか
見えなかった…。

それから・・・
横に並んで歩いてくる…
その三人は、

ポチの3メートルくらい
手前で立ち止まると…

まず、鈴鹿らしき娘が

シルフィらしき娘の方を
見て…

「しかし…

何度か見ているが…

あいも変わらず

シルフィの衣装は、

露出がすごいのだ。

さあびす、という奴が」

…と、声をかけると…

やはりシルフィだった
サンダルをはいた、
その銀髪の娘は、

両腕で胸の方を隠しながら…

「し…仕方ないでしょ。
あたしが生きてた頃は、
この衣装が^{いしやう}
普通だったんだもの…」

そう言うので…

今度は、現実世界と
同じように、

茶色い制服を着たポチが

「その両腕に書かれてる
緑色の紋様は、
なんなんだ？」

その事について
聞いてみる。

すると、現実世界より
少し大人になった姿の
シルフィは、

「ああ…精霊印の事ね。
昔、

連続して起こった台風に
よる大災害があつてね…
それを当時の人々は、
精霊が怒っていると

思ったので…

精霊印を書いた、

あたしを

イケニエにして…

精霊の怒りを鎮めようと

したのよ。」

自分の両腕に

描^{えが}かれた紋様の

事について話し

フワリの隣で、

その話を聞いていた

鈴鹿が

「なるほど…それで、

シルフィをイケニエに

捧^{ささ}げた人々が…

犠牲になった、そなたを

風の精霊の一部に

なったのだと信じて、

時が経つにつれ…

いつの間にか、

そなた自身が風の精霊と

同一視されるように

なった訳じゃな…」

そう話すと・・・

その鈴鹿の予想が

当たっていたのか…

シルフィ

「まあ、

そんなところね…」

そう言つて…シルフィも
うなず
頷くので、

その横で話を聞いていた
フワリが…

「イケニエかあ…
フワリには、出来ないな
だつて・・・死んだら
ポチに会えないもん…」

つぶやくように
そう話すと…

その隣で…シルフィは、
口元を左手で、ふさいで
クスクス笑つてから…

口元から左手を離し…

「まあ、いろんな
価値観があるという事よ
確かに、あの当時
あたしは、

イケニエに選ばれて、
幸せだと思っただけ…
それは、あたしの考えで
あつて…
別に、あんたがあたしと
同じ考えになる
必要なんかないのよ。」

そう言つたあとで…

シルフィ

「じゃあ、あたしの話は
これくらいで、
いいでしょ。」

…と、そう話をまとめて

それからポチに、

「じゃあ、ポチ。

もうちょっと、下がって
くれないかな…。」

…と、声をかけて

ポチ

「うお…いや…ああ…
わかつた…。」

ポチが3歩くらい
うしろに下がって…

シルフィ、フワリ、
鈴鹿の三人から…ポチが
5メートルくらい
距離をとると…

鈴鹿、シルフィ、
フワリの三人は…
左手を上の方に伸ばして

広げた左の手の平を
空に向かってかざすと…

その三人の
左の手の平の上に、突然
強い光が現れ…

その光と共に…
鈴鹿の上には、
銀色の扇子が…

シルフィの上には、
金色のたてこ豎琴
が現れて…

フワリ
「フワリだけ…なんで

トライアングル？」

…などという

フワリの不満をよそに、

三人は、

一瞬の光と共に出現した
それらの道具を
その手にとると…

鈴鹿は、

左手を振る事で
その左手に持った扇子を
バツ…と開いて

そのあと・・・フワリに

「ところで…フワリは、
他の人格にも
呼びかけたのかの？」

…と、聞いてきたので

フワリは、

右手でつまんだヒモに…
三角形の鉄の棒を
つり下げて…

左手で、それを鳴らす
鉄の棒を持ちながら…

「うん。」

呼んではみたけど…

鈴鹿ちゃんと

シルフィちゃんの他は、

どの人格も、まだ

ポチが会ってないし…

それで、

お祝いをするのは、

変だろうつて事で…」

そこまで言つと…

鈴鹿も、

「うむ。確かに

会つてもいないのに…

いきなり、この世界で

姿を見せるというのも

変な話だしの…」

そう言つて、納得し…

それまで…フワリの隣で

二人の話を聞いていた

シルフィが小さな竖琴を

右腕に抱えて

「鈴鹿…」

…と、呼びかけると、

鈴鹿は…

「うむ。そうじゃな…」

…と、

フワリとシルフィの
前に出て・・・

鈴鹿御前

「では、ポチ殿…

これからが

真^{まこと}の妾^{めかけ}達の

贈り物じゃ。」

…と、ポチに呼びかけ

シルフィの豎琴の音色と
共に…

開いた銀色の扇子を、

ひらひら動かしながら、
舞を舞い始めた・・・。

それからというもの…

シルフィが左手の指先で

右手に抱えた

豎琴の弦を弾いて

鮮^{あざ}やかな音色を

奏^{かな}でれば…

鈴鹿が、
その音色に合わせて
ひらひらと扇子を動かし
舞い踊る…。

さらに…

それに合わせて
フワリが

右手につり下げた
三角形の鉄棒に、

左手に持った

小さな鉄棒を打って…
チーン…という音を、

何度も奏でながら…
歌を口ずさみ

その三人を
少し離れた場所で、
見ていたポチの胸に…

ポチ

（なんだろうな…この
あたたかい気持ちは…）

おだやかで、どこか
なつかしい…不思議な
気持ちが広がっていた…

そして…現実世界では…

茶色い制服を着たポチが
テーブルの近くで、
横になって寝ていた…。

そこに…たたんである
大きなタオルを
両手に持った
フワリが現れ…

しゃがんでから、
横になつてるポチに

両手に持った
大きなタオルを
広げてから…かけると、

フワリは、
ポチの犬のような額に…
そ…と…キスをして、

「お休みなさい…ポチ
いい夢を…」

寝ているポチに、
そう言う…

巫装束みこしょうぞくを着た

フワリは、立ち上がった

夜の居間を出るのだった…。

【第7話 終】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2575e/>

ミューズゼロ《読みにくい方はフレイムファンタジーを見て下さい》

2010年12月7日02時43分発行